MILF of STEEL RETURNS

ミルフオブスティール リターンズ

Don't meddle in my daughter!

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の購入・閲覧禁止

TAMAKI NOZOMU PRESENTS

TAMAKIYA

SPECIAL GUESTS
ブッチャーU
もっちー
ナッピー
タカスギコウ
チバトシロウ
774
ICE
迂闊十臓
ささきタツヤ
おおくぼマタギ
ウチのムスメに手を出すな！公式同人誌
MILF of STEEL
ミルフ オブ スティール
RETURNS
リターンズ
TAMAKI NOZOMU
PRESENTS
和六里ハル
かのえゆうし
神野オキナ
富士原昌幸
GEMMA
ティクラクラン
環望
2015 SUMMER
環屋

この世界は
一組の家族によって
守られている

CONTENTS

05 環望（漫画）
17 もっちー（イラスト）
18 ブッチャーU（イラスト）
19 ナッピー（漫画）
30 Gemma（小説）
38 774（漫画）
40 タカスギコウ（イラスト）
41 ICE（イラスト）
42 ささきタツヤ（イラスト）
43 チバトシロー（漫画）
47 神野オキナ（小説）
60 迂闊十臓（イラスト）
62 おおくぼマタギ（漫画）
64 和六里ハル（イラスト）
65 かのえゆうし（漫画）
68 ティクラクラン（小説）
82 富士原昌幸（漫画）
83 環望（漫画）

セーラー！

笑ってセーラ

ウー

ウー

セーン——ラ

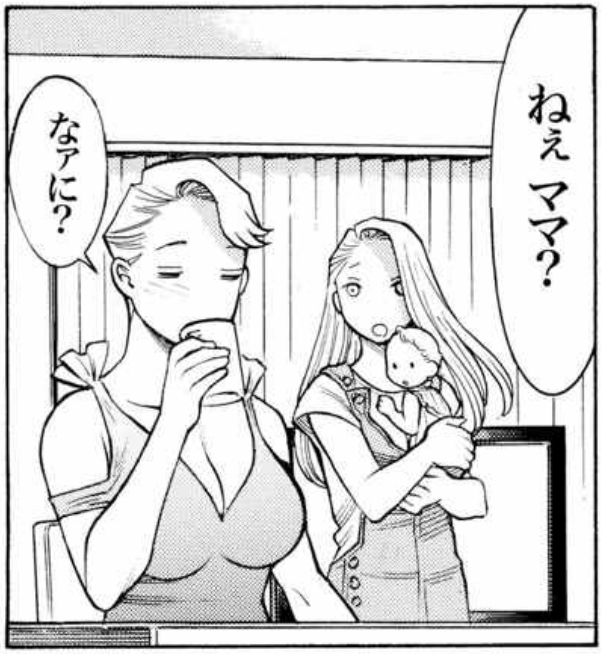
お前はなんてかわい〜〜んだァ！

チャッ チャッ

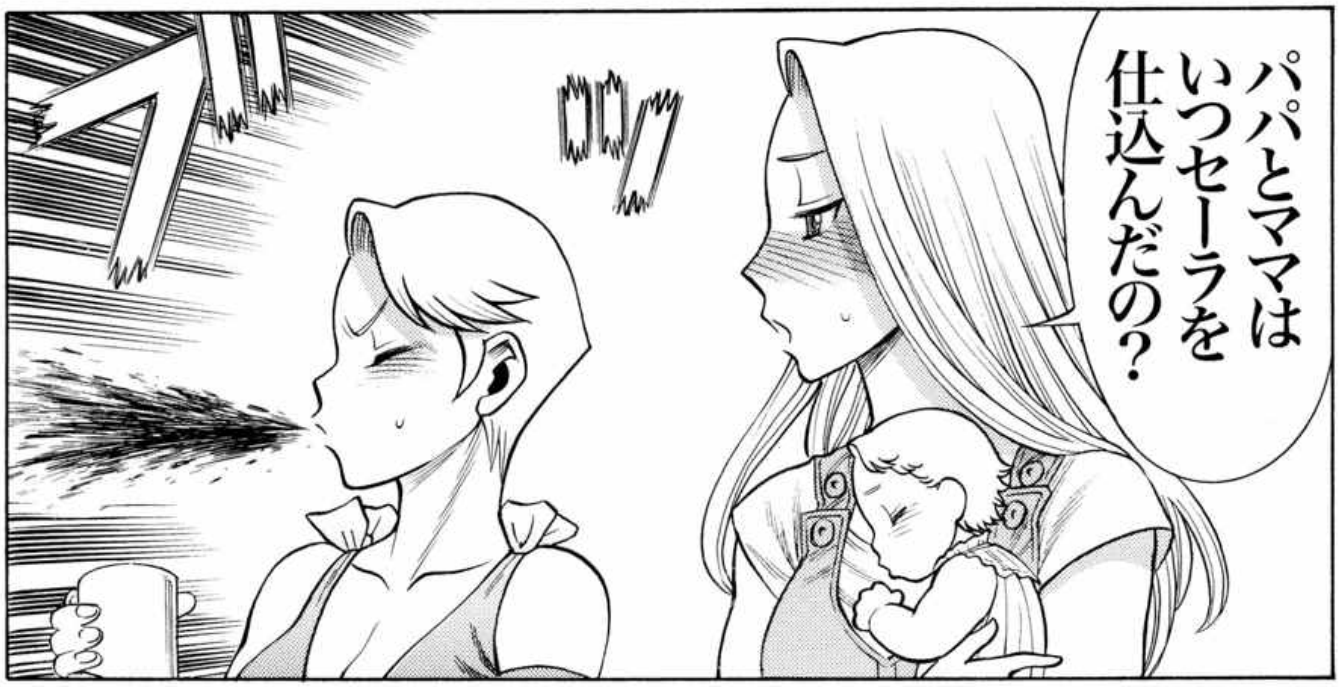
お姉ちゃんの事好き？

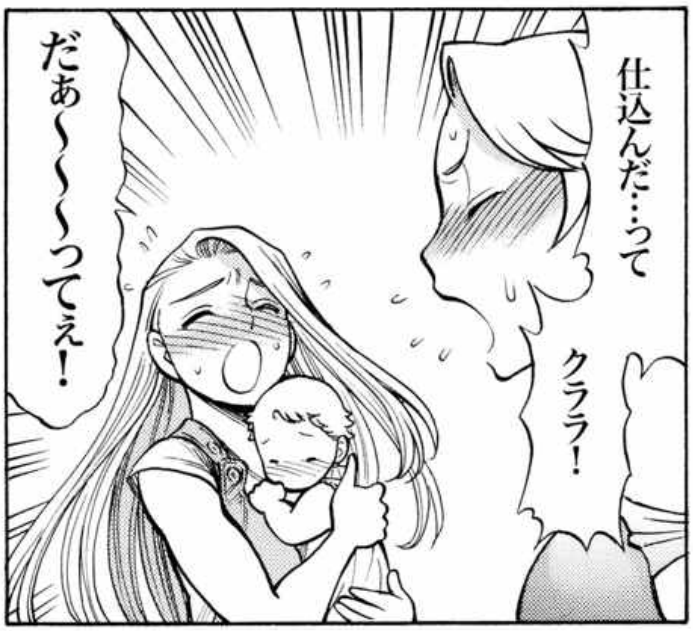
お姉ちゃんはお前の事だぁいすき〜

……


ねぇ ママ？
なァに？

ずっと気になってたんだけど
セーラがお腹にいる…って分かったのって…ブロウジョブとの最終決戦のあとすぐだったよね
だとするとちょっと計算合わないんだけど


パパとママはいつセーラを仕込んだの？
ゴゴゴ


仕込んだ…って
クララ！
だぁ～～～ってぇ！

いつ…といわれても

洗脳されて
ディープスロートに
なってた時 彼の奴隷として
姦りまくっちゃったから
あー
どれがヒット
しちゃったかなんて
わかんないわ
いや！
アレは全部
ナシ！
あんな愛の
ない交わりで
生まれたなんて
娘が不憫すぎる！
プル
プル
やっぱり
あの時…
二十年前の
世界から
あの人を助け出し
現代に戻る
時間流の中で…

どうしたんだ
アテナ
いきなり
よりによって
こんなところで
だって
だって…
二十年ぶりに
あなたのニオイ
嗅いだら
もう…
もう！

20年ぶりって…
お前の時間じゃ
ほんの半日位前に
姦りまくっただろ

って、
おぅ！

ハブッッ

話聞いて
ねぇッ

ジュウウ

はは…
やっぱコレ
だわ！

若い頃のお前にゃ
このネチっこさが
なくってな

その分
馴れてなさが
初々しかったが

おっ！
おっおっ
おおおおっ
ジュッポ
ジュッポ
ビンッ

ゴクゴク
今の私と過去のあたし…
魅力的なのはどっち？
はあ？
お前…なぁ
自分自身にヤキモチ焼いてンの？

どっち？

カパッ

若い頃のあたしには出来なかった事

今の私ならしてあげられる事…

た～～～くさん…あるのよ？

ね？

……

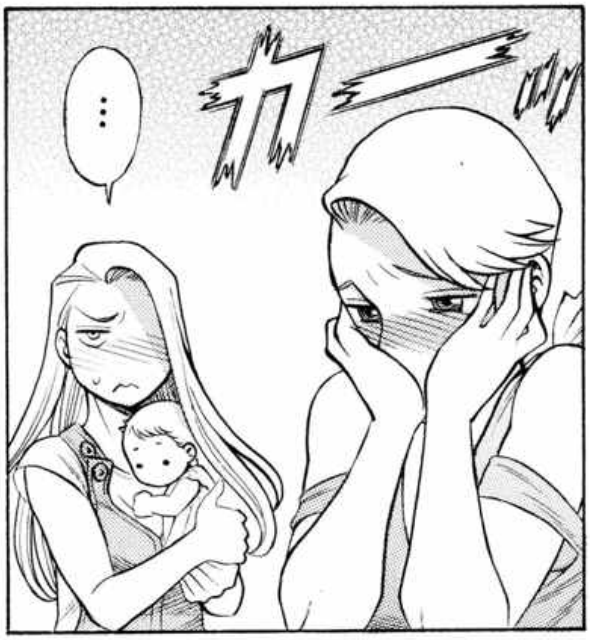
ブワ

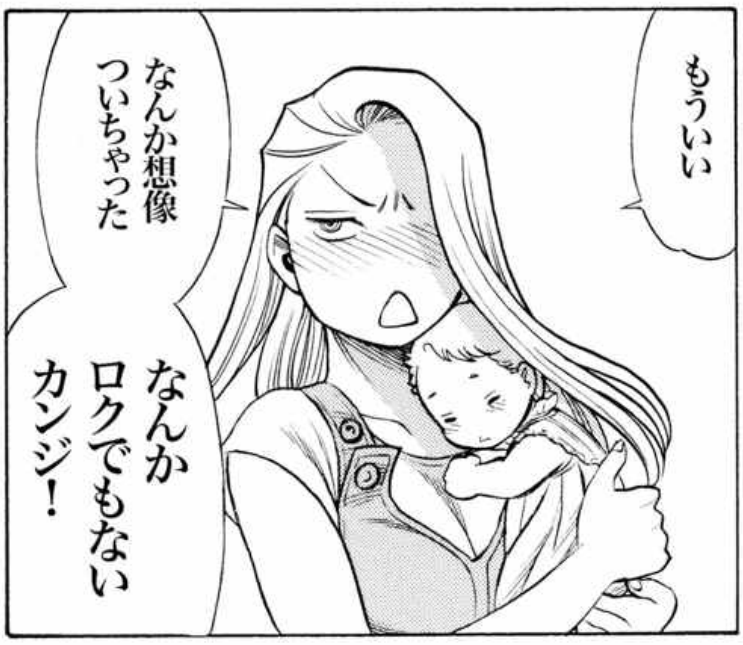
どうだっ！
これがっ！
欲しいんだろ！
いい歳して
サカリが
つきやがって！
どうしたどうした
トロットロの
イキ顔
さらしやがって
年の功で
色々シてくれるん
じゃなかったのか

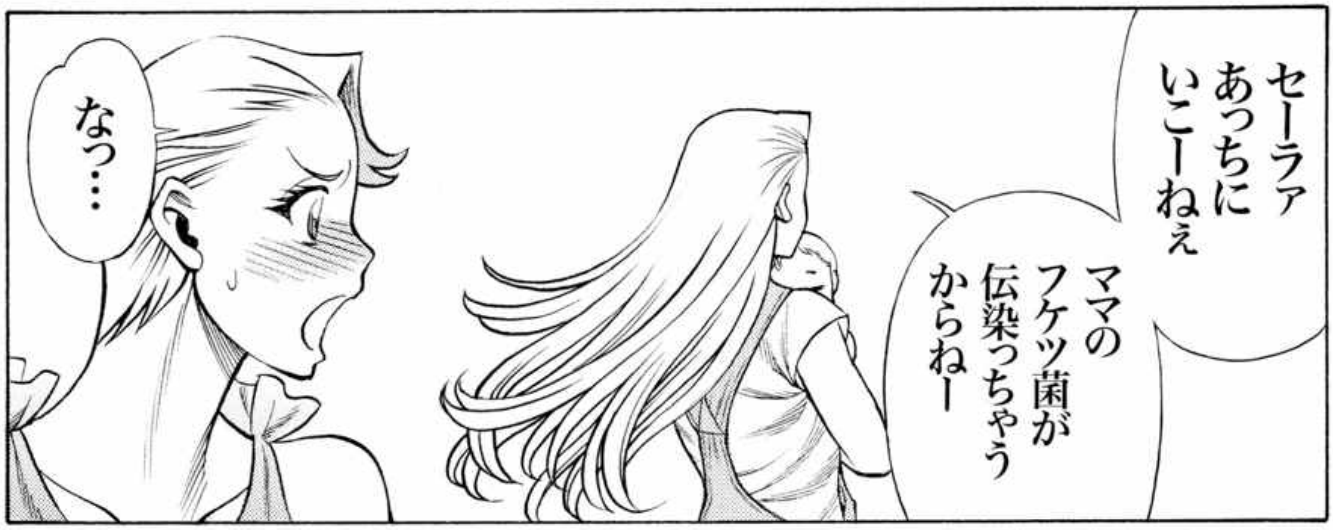
ムチュッ
むぶっ
ブルッ
おほっ
オッオッ
おウ！
おぉ
ヤべぇ
アレで
イクっ…
待って！
アレで
イかせて…
パチャ
パチャ
パチャ

来ちゃう！
子宮に直接来ちゃうぅ！
知らねぇぞ！こんなとこで子作りなんて…

どんなコが生まれるやら！
ああああっ







そして…
その力を巡って
私たち一家は再び
嵐の日々に
分け入ることに
なるのですが

それはまた
別のお話

■ディープスロートのデザインをさせていただいたもっちーと申します。デザインと共にディープスロートという名前も採用して下さってとても嬉しかったです。

「股間には常に遠隔操作型のディルドーがハマっている」との指定だったので、ただちに思いついた名前でしたw。

絵に描いたような大団円、大変素晴らしかったです。お疲れ様でした！

また、彼女達の活躍が見られる日を楽しみに待ってます！

もっちー

どうだ、アテ…
ディープスロートの様子は？
はい、経過は良好です。
調整を行い、捉えたヒーローとの
交配訓練に勤しんでおります。
現状は快楽に溺れる事はあっても
百戦錬磨。次々とヒーローを
再起不能にしております。
そろそろ体格差のあるヴィランと
交配させて経過を調査する予定です
それは良い。
過去に私が受けた仕打ちを存分に
味あわせてやらねば
孕ませても構わん。
容赦なく射精させ
許容量と着床率のデータを
まとめておけ。
記憶と子宮内のデータは
いくらでも改竄できる
あの街で自身の子供と
戦わせるのも悪くはない
ドクッ
ドクッ
ドクッ
ドクッ
ビュルルッ
ビュルルッ

THE BIRTH OF DEEP THROAT

二代目エイスワンダー脅迫事件を見事解決した初代エイスワンダー〝アテナ〟であったが、その直後に現れた堕天使アルテミスの不意打ちに敗北…そのまま拉致されてしまった。その後、アルテミス同様に五感に受ける刺激が全て性感に変わるという拷問とも言える人体改造を施され、遂には快楽の泥沼に沈んでしまった――。

ガッ!!
戦闘スーツがまた着せられてる…こ…これは…
初代エイスワンダー
アテナ

あ…アナタは
これは一体何のマネなの!?
アルテミスは無事なの?

クッ…頭が…

ようやく目覚められましたね、エイスワンダー。さすがの貴女も性的快楽は相当応えたと見受けました。

我が首領はおっしゃいました。アルテミス同様に貴女にも雌犬奴隷になってもらうと…。
レディ・デススティンガー

ザッ…

まずはその為の第一ステップ。この者達に協力してもらいます。

オーク戦闘部隊!!?

ゲヘヘ…よお奥さん

良いケツしてんなぁ

何のつもりよ。今更コイツらが私の相手になると思ってんの？

クッ

このアマぁ!! 今すぐヒィヒィ言わしてやるからなぁ!!!

ドゴォ
ほらほらぁ
ボケっと
してんじゃ
ないわよ!!
どんどん
行けェ!!
このままじゃ
俺達ホントの
雑魚だぞ!!

どうだ？様子は…

今始めたばかりでございますが…程なくして症状が現れるものかと…

アルテミスと違い快楽にはそれなりに耐性があるからな。

ブロウジョブ首領
ゼノビア

だが今ここにいるオーク共が倒されても想定内の事だ。

エイスワンダーがいかに優れた戦士だとしても…

女である以上結果は同じ。遅いか早いか…それだけだ。

ハァハァ

タラ…

な…何よ
これ……
こんな時に…
あ…アソコが…
足腰のふんばりが
効か…ない。
おやぁ…
どうした奥さん。

あ
あ
ダメージが性感に変わっている…。
ガッ
防御の意味がない…。
ガッ
全然効いてないわよ!! このー!!!
こ、こんな…
自らの攻撃さえも……。

ゴオ
しまっ…
ぁぁぁぁっ!!!!
ぁぁぁっ
ビクビク
やっとテメェに引導を渡す時が来たぜ!! 俺は戦闘部隊の最終兵器!!!
ビクビク
ぁぐ
グ
や…やめ…

ビチャッ
ビクッ
ビクッ
ア
ア
ア

おいおい…もう闘いになんねぇよこれじゃあ…
その後、実に十数時間に渡り拷問室とアリーナを往復する事を強いられたアテナ。戦乙女の羽根がむしり取られるかの様に性の奴隷へと作り替えられていった。
オラッてめぇの足で移動するんだよ!!
なんか可愛そーだね

そして――

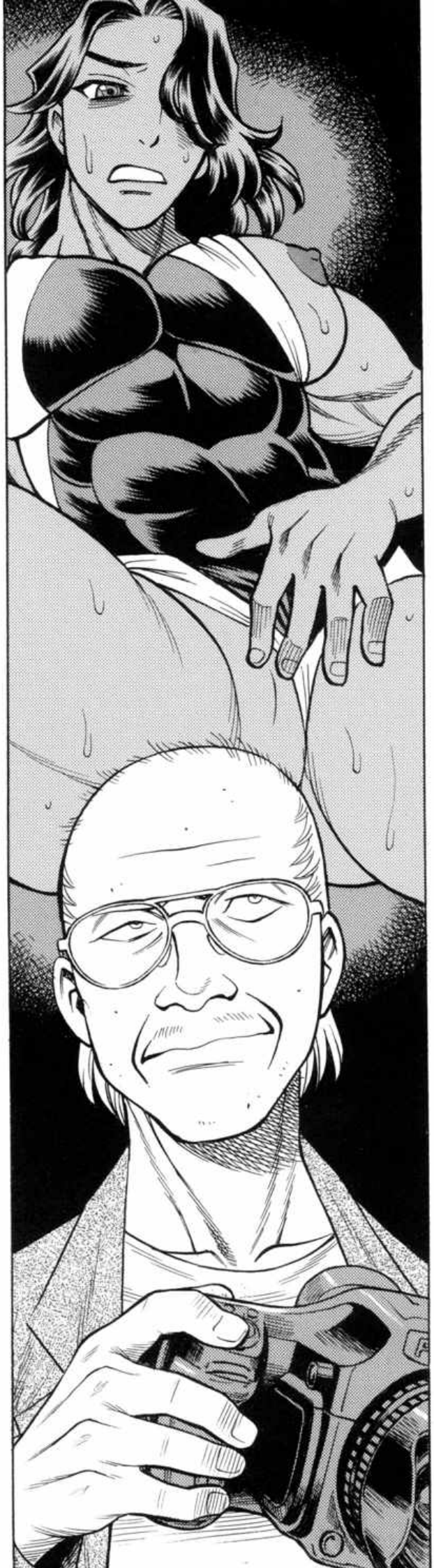
今日からお前はブロウジョブの奴隷ディープスロートだ。分かったか？

初戦の相手が来たぞ。
代官エ、ワンダーと
裏切ントブランクだ。
は、
おそらくオーク共とは
比べ物にならない程の快楽を
与えてくれる筈だ。
はあああ！！

EighthWonder War Journal

A Worm Will Turn

Gemma



女のからだが一つ、影の中でうごめいていた。
汗ばんだ肌が望遠レンズの中でなまめかしくうねる。縄のような筋肉の浮いたたくましい腕が、両足のあいだに潜り込んで不器用に動いている。櫂をこぐような腰の動きは、本気で快楽をむさぼっている証拠だ。
肉厚の唇が閉じて、また開く。熱い吐息が目に見えるようだ。彼女のいる所までたっぷり三百メートルはあるが、プラスト・オプティック製の超望遠レンズはまるでかぶりつきで見ているように細密な光景を伝えてくれる。青みがかった紫色に充血した陰部の肉も、それをかき回す青色の無骨な指も、目に痛いくらいにはっきり見える。
女の名はマッシブガール。鋼鉄の肉体を武器に悪と戦う、青い肌のスーパーヒロインだ。
マッシブガールが出動の後、いつも欲情しているというのはこれまでも公然の秘密というやつだった。食い込みのきついレオタードで、戦いが終わるたびに太腿を摺り合わせ、腰を意味ありげによじってはもじもじしているのだから、一度でもその場に居合わせれば誰にでもわかる。宿敵のフォーダウンと激戦を演じた後はいつもすっ飛んで帰るのも、たまに戦いの後にインタビューなんか受けるとカメラマンの股間をやたらチラ見するのも、そういうことなんだろうと誰もが思っている。
今日はマッスルロックとセント・エルモのコンビが、原油を強奪しようとコンビナートで暴れ回ったのを、彼女が駆けつけて鎮圧した。この後、すぐ夕方に近所でチャリティイベントが控えているので、一旦戻る時間はないはずだ。火災の危険があるので、TVカメラも入って来ないし、一般人が近寄る恐れもない。今のうちに物陰でこっそり「処理」してしまおうと考えるのは、自然な発想だ。
マッシブガールの腰がひときわ高くぐっとせり上がって、そのまま硬直した。絶頂を迎えたのだ。二度、三度と、虚空へ腰を押しつけるように突き上げる。相当激しいアクメを味わっているようだ。しぶきが夕日に照らされてキラキラと光る。やがて、彼女のたくましい体から力が抜けて、ぐったりと送油管にもたれかかる姿を最後に一枚写真に収めると、俺は急いでレンズとカメラをバッグにしまって立ち上がった。エクスタシーの波が引いて、理性と警戒心を彼女が取り戻す前に、この場を立ち去らなくてはいけない。

「何してんの？　アンタ」

遅かった。
数秒前までファインダーの向こうにあった青色の顔が、今は目の前で俺を見下ろしている。三百メートルくらいの距離は、彼女の脚力なら一跳びだ。決して背の低いわけではない俺だが、二メートルをこす彼女と並ぶと大人と子供の気分になる。
「や、やあ、ハハ……どうも」
「何してんのって聞いてんだよ」
俺が返事をするより早く、マッシブガールは俺の下げていた鞄を奪い取り、中のカメラを乱暴に取り出す。
「あ、ちょっとそれは」
「アンタみたいな奴がいるから……！」
綺麗な顔をしかめるや否や、彼女は四十万もした俺のカメラを紙風船か何かのように片手で握り潰した。
「な、何しやがる！」
「こっちの台詞よ、このクズ！」
もはや原型のわからない黒い金属の塊と化したカメラを俺は慌てて拾い上げる。「う、う、訴えてやるからな」
「訴えてごらんよ。盗撮しかできない三流のカメラマンが裁判所に顔を出せるっていうならね」
唾を吐きかけんばかりの顔で、マッシブガールは俺を睨みつけると、次の瞬間身をひるがえし、砂埃を巻き上げてものすごい速度で飛び去っていった。猛烈な砂埃に咳き込みながら、ズボンの埃を払って立ち上がる。伸びをすると背筋がきしんだ。
彼女に言われたことは、おおむね全部当たっている。俺の名前は蛭代弾（ひるしろだん）。スーパーヒロインのあられもない姿を盗み撮っては写真週刊誌に売って日銭を稼ぐ、ちんけなカメラマンだ。
スーパーヒロイン、またはスーパーヴィラネスという連中がいる。彼女たちはほぼ例外なく美人で、ほぼ例外なく魅力的なスタイルの持ち主で、そしてほぼ例外なく、体のラインがくっきりわかる半裸や全身タイツで戦っている。鍛えられた肉体を持つ美女が、おっぱいの形までまるわかりのコスチュームで飛び回り、暴れ回り、しばしばコスチュームが破れてあられもない姿をさらすというのだから、男どもの注目を集めないはずはない。戦うヒロインの「勇姿」は雑誌、TV、ネット、あらゆるメディアに氾濫している。
「いやあ、こういうのに食いついてバシッとモノにしちゃうところは、やっぱり弾ちゃんだなあ」
マッシブガールのオナニー写真を手に、『キング』編集長の駒井田は上機嫌だった。今から入稿すれば今週号の下版に間に合う。カメラを片付ける前に、念のためメモリーカードを抜き出しておいてよかった。それと、マッシブガールがメカに弱くて助かった。
「こういうのじゃないと、あんたの所は買ってくれんじゃないか。好きでやりゃあしないよ、こんなしんどい写真」
俺は苦笑いをしながら、ぬるい麦茶をあおる。

なにしろ、一億総カメラマンの時代だ。どんな事件であれ速報性にかけては、一般市民の携帯カメラに太刀打ちできるものじゃない。おまけに連中せっかく撮ったその写真を、ブログだツイートだと言って平気でロハで公開しやがる。商売あがったり、とはこのことだ。

それでも写真で食っていこうと思えば、素人には撮れない絵を狙っていくしかない。今回のマッシブガールだって、ウラを取るのに一週間、それから彼女が出動するたびに張り付いて、モノにするまで三週間かかっている。そうまでして撮った写真を載せてくれるのも、今やこの『キング』ほぼ一誌だけという有様だ。おかげでフリーの俺も、ほとんどここの専属カメラマンみたいになっている。

「ただねえ、彼女は難しいんだよな。顔ボカしても、色がねえ」

「一色ページに載せりゃあいいじゃないですか」

「うんまあ、そうするんだけどね。でも勿体ないよな、色が魅力なのに。人外肌って流行ってるんだぜ、今」

駒井田がさも残念そうに体を丸める。確かにマッシブガールの写真は、目線を入れようがボカシをかけようが肌の色で彼女だとわかってしまうので、プライバシーに触れないレベルの掲載が非常に難しい。もっともこの編集長の場合、単に青色だの緑色だの妙な色をした肌が好きという性癖がこの男にあるだけなのだが……。

よく勘違いされるが、完全に個人が特定されてしまうような写真は、俺達は絶対載せない。顔は必ず隠すし、目立つエンブレムなんかにも修正を入れて、「マニアなら察しがつく」程度のレベルにぼかしてから掲載するのが鉄則だ。芸能人や政治家のスクープ写真よりずっと気を遣っている。

芸能人なら事務所があり、規定があり、損得勘定がある。どこまでがセーフでアウトかをドライに判断してもらえる。だが相手はヒーローだ。ああいう手合いには法律も損得もない。そんなものよりも、自分の中の正義感で動くのがヒーローという人種だからだ。実名で男性遍歴を公表されてブチ切れたあるスーパーヒロインが、『フラッシュ』編集部の社屋を真っ二つにヘシ折ってからというもの、俺達はヒーローの個人情報を出さないよう、少なくとも言い逃れできる余地を残しておくよう厳重に配慮するようになった（ちなみに『フラッシュ』はその事件以降紙面を残らず入れ替え、ヒーロー全面支持派に転向した。業界ではこの事件を「フラッシュ・ポイント」と呼んでいる）。

たまに「匿名のあのヒロインの正体をあばく！」なんて企画を持ち込んでくる馬鹿がいるが、冗談じゃない。そんな情報、ヘタに手に入れたらこっちがヴィランに狙われる立場になっちまう。

「弾ちゃん、この後予定ある？　どう、ちょっと」

駒井田が写真を脇に置いて、杯をくいっとやる古めかしい仕草をした。しばらくいい酒も飲んでいない。ごくりと喉が鳴ったが、残念ながら今日は第二水曜日である。俺は片手で拝む仕草をしながら、帽子をかぶり直して立ち上がった。

「行きたいんだけど、今日は大事な取材があるんだ。再来月の特集に組む大ネタ、欲しいでしょうが」

その足で俺は地下鉄に乗り、中目黒のとあるビルに向かった。震災前に建てられた古いビルで、五階までは賃貸オフィス、六階から上は出版社の倉庫になっているが、そんなことはどうでもいい。大事なのは、このビルの最上階には滅多に人が入らず、西向きの窓があって、しかも非常階段の鍵が壊れているということだ。

このビルの最上階の窓からは、通りの向かいのビルの屋上にある、スポーツ用品メーカーのでかいオブジェがよく見える。正十二面体をしたそのオブジェの、ぴかぴかに磨き上げられたジュラルミン製パネルの一枚に、彼女のペントハウスがちょうど映るのだ。

四十九院（つるしいん）明日華。またの名を、「紅玉の魔女」ビジョンブラッド。

女神アスタルテの加護を受けてエジプトの魔術を操る魔法使いで、素顔と本名を公表している数少ないスーパーヒロインの一人だ。大金持ちのお嬢様の上、本人も会社をいくつも経営しており、おまけにふるいつきたくなるような美人という、もうどうしたらいいやらって感じのスーパーヒロインというか、スーパーウーマンである。

また彼女は、レズビアンであることも公表している。そのことを残念がる男は多いが、一方で熱狂的な女性ファンを生む理由にもなっている。女性ファンの数だけで言えば、エイスワンダーにも並ぶかもしれない。

自分の所有する高級マンションの屋上にペントハウスを構える彼女のプライバシー管理は徹底している。マンションに入居できるのは厳しい身元調査を通った人間だけで、警備も厳重。聞くところによれば自衛隊の一個中隊くらいなら撃退できる魔法の防御が施されているのだとか。そしてマンションより高い建物は周囲になく、上から覗かれる心配はない（もちろん、屋上のオブジェまでは計算に入っていなかったわけであるが）。

彼女の私生活……有り体に言えば、レズ場面を見たがる男は多いが、それに挑んだカメラマンは多くない。何しろ相手は魔法使いである。バレたらどんな目に遭わされるか、わかったもんじゃない。その一人目になれるかなれないかの瀬戸際に、今俺は立っている。

カメラのピントを慎重に調整していくと、パネル

に映り込んだ彼女の家の窓がぎりぎり見えた。カーテンが少し開いていて、ベッドが見えている。俺は嬉しくなって、思わず口笛を吹いた。

毎月第二水曜日は彼女の経営している会社の重役会議がまとめて行われる日で、彼女はその日だけはヒーロー活動を休み、よほどのことがない限り出動しない。つまり、夜に自宅にいる可能性もぐっと高いというわけだ。俺がここで張り込みを始めてから、今日で三度目の第二水曜日。できればそろそろ、何か起きてほしいもんだ。

ファインダーの中にちらりと動くものがあって、俺は急激に意識を引き戻した。ちょうど窓一枚分ほど開いたカーテンの切れ間を、裸の女が通る。何しろ鏡に映った画像だから細かい所まではわからないが、長い黒髪と均整のとれたプロポーション、何より輝くような赤い瞳は、ピジョンブラッド、四十九院明日華本人とみて間違いない。ヌードが撮れるとは、こいつはラッキーだ。

あとは女でも連れ込んでくれたら万々歳なのだが。などと思いながらファインダーをのぞいていた俺は、次の瞬間絶句した。

四十九院がカーテンの影から手を引いて連れ出したのは、裸の男の子だった。

目を疑ったが、もう一度見直しても確かに男の子だ。年の頃は十二、三歳くらいか、ほっそりして手足が長い。キョロキョロと落ち着きなく左右を見回しているその子を、四十九院は優しくベッドへ押し倒すと、その上にのしかかった。華奢な手足を振り回して暴れるのに構わず彼女はその上にのしかかり、両手で子供の腿をつかんで動きを封じると、広げた両脚の間にそのまま顔をうずめた。

ぎくり、と男の子の全身がこわばって動きを止める。その股間で、ピジョンブラッドの黒髪の頭がゆっくり上下している。なんてこった、ヌードどころか、あのピジョンブラッドのフェラが撮れるとは。

やがて、男の子の腰がそれに合わせて上下に動き始めた。そりゃ、あんな歳のガキがフェラなんて味わえばそうなるだろう。じきに子供が腰をぐっとせり出し、顎をのけぞらせて硬直する。硬直が収まって子供の腰がぐったりとベッドに落ち、さらにしばらく経ってから、ようやくピジョンブラッドは顔を上げた。

ありゃあ、間違いなく飲んでいる。口元をアップで抜けないのが残念だ。そんなことを考えている間に、ピジョンブラッドは男の子に何事かささやくと、もう一度股間に顔を埋めた。お盛んなことだ。今度は子供の方も抵抗せず、むしろ自分から腰を押しつけている。前よりも短い時間で、その子は射精した。そして、間を置かずに第三ラウンド。

結局、彼女が子供を解放したのは五度目の射精を味わった後だった。カナリヤを食ったばかりの猫みたいな顔で、指の間をぺろぺろ舐めている。カメラを覗いている俺の方も、まさにそんな気分だった。こいつは文句なしの特ダネだ。

それにしても彼女、言動がみょうにファッションレズ臭いところがあるからバイかもとは思っていたが、よもやショタコンだったとは。そういえばシスター・ベロシティの恋人も年下だとかいう噂を聞いたことがある。スーパーヒロインには年下好みが多いんだろうか。やはり腕力が物を言う世界で生きてるから、考え方も男性的になって、支配しやすい弱くて従順な異性を求めるのかもしれない。そんなことを考えながら俺はカメラをしまうと、メモリーカードを抜いて懐の紙入れにはさみ、とりあえず祝杯を挙げに街へ出た。都会の初夏の蒸し暑い風も、今は気持ちいい。久しぶりにいい気分だった。

翌日の朝刊を見るまでは。

『長野県H川で小学生児童水死』

その見出しと共に一面に掲載された顔写真を見て、俺は凍り付いた。それは確かに、昨日四十九院明日華の寝室にいた、あの男の子だった。

「……いやいや。いやいやいやいや」

誰に弁解しているのかよくわからない、意味のない言葉をつぶやきながら、俺はPCを立ち上げて昨日の画像を確認した。それは確かに商売柄、人の顔を覚えるのは得意だが。そんなはずはない、いくら何でも。そんなはずはない。

だが祈りはむなしく、画面で再度確認したその顔は、間違いなく新聞に載っていた男の子だった。髪の色、目尻の形、口元のホクロの位置までも。俺はとりあえず、その日の午前中に入れていたアポを一件キャンセルして、冷蔵庫からキノコとピーマンと豚肉を取り出して朝飯の野菜炒めを作った。何でもいいから、現実逃避がしたかったのだ。

野菜炒めを食い終わる頃には、頭も冷えていた。まず最初に、この事件の詳細を確かめなくてはならない。俺はネットを漁り、新聞社の知り合いに電話をした。

H川沿いの山間地で、子供が昨日から行方不明になった。よく腕白をする子なのではじめは心配していなかったが、夜になっても戻らないので近所の人が捜索を開始した。今日未明、H川に浮いているのが発見された。暴行された形跡はなく、遊んでいるうちに足を滑らせて川に落ちたと思われる。

「川は明るいうちに何度も見たのに、誰も気づかなかったっていうんだよね。まあ、そういうこともあるだろうけど」新聞社に勤める友人は、電話の向こうで大きなあくびをしてから付け加えた。

「それと妙なことがあって、死因が溺死じゃなくて、衰弱死かもしれないんだそうだ」

「……」

俺は礼を言って電話を切った。

エイスワンダーやスターフェアリー並みとはいか

ないが、ピジョンブラッドも空は飛べる。確か、小型ジェット機くらいの速度は出せたはずだ。昨日の晩のうちに東京から長野まで飛んでいって、死体を川に捨てて帰ってくる。できない話ではないはずだ。

俺は次に図書館に行って、エジプト魔術の本を調べてみた。図書館にあるような本に載っている魔術を、彼女が使っているのかどうかは知らないが、何かの参考にはなるかもしれない。

〈女神アスタルテの魔法。子供の生命力を捧げて見えない翼と強い腕を得る〉

「……」

いやいやいや。

あのピジョンブラッドだぞ？　魔界からの侵略者を撃退したことも、ミイラ軍団から総理大臣を守ったこともある。今回のことだって、何か事情があったのかもしれない。あの子供が呪われてたとか、何とか。

もし万が一、俺の想像してるような事態だったとして、俺に何ができる？　こっちにあるのはたかだか十数枚の盗撮写真。警察に持ち込んだ所で、相手にされるか怪しい。よしんば事件として取り上げられたとしても、相手はスーパーヒロインで、女社長で、大金持ちだ。名誉毀損で訴えられるくらいならまだいい方で、どうかすると命まで危うくされかねない。彼女のファングループの熱狂ぶりはつとに有名なのだ。

頭を抱えたくなる。俺が欲しかったのはゴシップだ。本物の犯罪じゃない。こんなのは俺の手に余る。

一時間ばかりもうんうん唸っていただろうか。突然携帯が鳴って、俺は跳び上がった。

「弾ちゃん、今ヒマ？」

『キング』の駒井田からだった。「手が足りなくてさ。カメラ頼めないかな」

元町交差点のど真ん中に、巨大な花が咲いている。その周りに裸の女が群がり、男を求める悩ましい声を上げている。

女性のエクスタシーを餌にするという怪植物、エストロモンガー。しばらく前に都心に出現してから、頻繁に現れるようになった。動物のメスだけをフェロモンで操り、猛烈に発情させるという、ある意味夢のような植物である。出てくるたびにどぎついカットが一つや二つは撮れるし、性質上死人が出ることもまずないので、仕事上何かとお世話になっている。

「いやあ、助かったよ。なんだか都内でその辺の人がいきなりキレるっていう変な事件が起きててさあ、人をみんなそっちへやっちゃったんだよね。でもこっちも押さえないわけにいかないでしょ、ウチ的に」

駒井田がメモを取りながら片手で拝んでみせる。編集長みずから取材に来ているところをみると、よくよく人が出払っているようだ。まあこちらも、大ネタのピジョンブラッドの件があんなことになってしまった今、臨時収入があるのは有り難い。俺は駒井田に指示されるままにカメラを向け、眼前で繰り広げられている痴態のそこここを切り取っていく。たまにはアシスタントも気楽でいいものだ。

都内で起きているという事件のせいか、ヒーローはまだ一人も来ていない。自衛隊科特部隊が植物を包囲しているが、女達が周囲を固めているために手が出せない。科特部隊は下半身をがっちり多う特製の貞操帯ズボンを装備しているが、何人か間抜けな奴がいたらしく、女達に捕まって腰を振っているのが見える。

「……なあ、こいつ前に見たのと少し違わないか？」

必要な枚数をあらかた取り終えた頃、駒井田がエストロモンガーの中心花を見上げていぶかしげに言った。確かに、今までに見たやつとは花の形も大きさも、ちょっと違う。ピンク色のはずの花弁は赤紫に近い濃い色で、唇のように見える花心の部分も、ずいぶん厚ぼったい。

「うーん……個体差じゃないですかね？」

「そうかもしれんけど……ん？」

俺達から少し離れたところで、大学生くらいの若い男が一人、夢中になってスマホで写真を撮っている。自分で気づいていないのか、じりじり近づいていくのが危ないなとさっきから思っていたが、そいつが横断歩道へ足を踏み出した途端、エストロモンガーの幹の部分から緑色のツタが恐ろしい勢いで伸びて、そいつを絡め取ってしまった。

止める間もあらばこそ、そいつはもがきながら引きずられていき、花の一つにばっくりと飲み込まれた。固唾を呑んで見守っていると、やがて花の中から、全身にツタを絡みつかせた裸の男が出てきて、他の女達に混じって歩き出す。

「うわ、キモ！」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう。あいつ、オスも食えるように進化しやがった！」

俺と駒井田は慌てて小走りに後ろへ下がる。だが、その動きが良くなかったのか、たちまち二本のツタが俺達へ向けて飛んできた。俺を狙った方は運良く外れたが、駒井田の足首にツタが絡みつく。

「ちょっ、うわっ、助けてーっ！」

甲高い悲鳴を上げる駒井田の手をつかむ。見捨てて逃げるのは簡単だが、そんなことをしたら今後の仕事に差し支える。ツタの力は予想以上に強く、二人がかりで踏ん張ってもじわじわと引き寄せられていく。脂汗がにじみ、腰にいやな痛みが走る。足が滑り、もうダメかと思った瞬間、ツタの力がいきなり緩み、俺と駒井田は並んで後ろにひっくり返った。

腰をさすりつつ顔を上げると、オレンジ色の炎の輝きが目を射た。エストロモンガーが燃えている。苦しそうに身もだえするてっぺんの花めがけて、炎

の槍のようなものが何本も降り注いでいる。見上げると、金色と青に輝く派手なコスチュームをまとった彼女がそこにいた。
「ピジョンブラッド……」
よりによって彼女に助けられるとは。エストロモンガーは女達に寄生したツタを伸ばして盾にしようとするが、ピジョンブラッドが杖の先でそのツタを叩くと、たちまち力を失って萎れていく。解放された女の裸体を、ピジョンブラッドが優しく抱き止めた。
「このピジョンブラッドの枯死の魔術から逃れられると思わないことです。女性を食い物にする厭らしい蔓草ふぜいが」
襲いかかるツタをさばきながら、次から次へと女達を救出していく。たまに男に寄生したツタが出てくるが、そういうのには手を出さず普通に杖でぶん殴って追い返している。フェミニストというのは残酷なもんだ。まあ、全身にツタを絡みつかせた全裸でアヘ顔の男なんて俺でも触りたくはないが。
「何やってるの、早く避難して！」
見とれている俺達二人の後ろから、元気のいい声が飛んできた。振り向くと、赤地に金筋のレオタードと真っ青なマント。
「エイスワンダー！」
日本人なら知らない者などいない。つい最近復活した、世界最強のスーパーヒロイン・エイスワンダーだ。二十年ぶりの復活にもかかわらず容姿が変わっていないので、クローンだとか宇宙人だとか、いや女神は歳を取らないんだとか色々な噂が飛び交っているが、何しろ実力は折り紙付きだ。このエストロモンガーを過去に退治したことがあるとも聞いている。ピジョンブラッドと彼女が来たのなら、ここはもう大丈夫だろう。
俺達が安全地帯まで下がるのを確認して、エイスワンダーは空へ舞い上がる。ちなみに彼女、その知名度と人気にもかかわらず、サービスショットが全然出回らないことでも有名だ。謎の妨害を受けるとかいう都市伝説もあるが、せっかく出くわしたチャンスを逃す手はない。飛び去るエイスワンダーのケツに向かってカメラを構えると、ファインダーの中で彼女が急に振り向いた。
「おじさん」
宙に浮いたまま、俺の近くまで戻ってきて、カメラを構えたままの俺を険しい顔で見下ろす。
「雑誌社の人だよね？　そのカメラと腕章」俺がうなずくと、険しい顔がいっそう険しくなった。
「おじさんさ、そーゆー写真撮ってて、恥ずかしくないの？」
「何だい、急に」
おやおや。俺は苦笑いが浮かびそうになるのをこらえて、心外だという表情を作った。若いヒーローの中にはたまにこうして、俺達のような商売の人間に説教をしてくるのがいる。まあ、そうしたくなる気持ちはよくわかる。
「私……私達はね、みんな頑張ってるんだよ。みんなを守って、幸せにしたいだけなの。ほかの、普通の人達みたいに、ただ見守って、たまに応援してくれればいいだけなのに。どうして、私達をそんな目でしか見られないの？　あなたは、何がしたくてカメラマンになったの？」
「……いやあ、参っちゃったなあ」
一つだけ、確実になったことがある。このエイスワンダーは、むかし活躍したのとは別人だ。何年もヒーロー・シーンの最前線で戦い続けてきた彼女が、こんな青臭いことを今さら言うはずがない。どう返事をしたものかと考えあぐねてヘラヘラ笑っていると、
「エイスワンダー！　そんな連中に時間を無駄にするのはお止めなさい。口をきく価値もない奴らよ」
上空でツタをさばき続けるピジョンブラッドが、鋭い声で呼びかけてきた。まったく、今日は彼女に助けられてばかりだ。エイスワンダーは我に返ったように背筋を伸ばし、もう一度だけ俺を睨みつけると、ピジョンブラッドの所へ飛んでいく。
「いい子だね～、彼女。若いっていいなあ」駒井田がポンと肩を叩いた。
「ヒーローは大抵いい子ですよ」
ともあれ、彼女達が本気になったからには、あのエロ植物ももうじき片付いてしまうだろう。俺は最後に、裸の女に絡みつかれるピジョンブラッドとエイスワンダーを何枚か写真に収めると、それ以上彼女達の目に止まらないうちにとっとと退散することにした。

数日後、深夜。
俺は人気の絶えた裏路地に、一人で立っていた。暖かくなってきたが、夜はまだ冷える。
待つほどもなく、彼女は現れた。暗い色のコートを着込んで、マスクとサングラスで顔を隠している。意外とベタな返送をするもんだ。
「やあ、よく来てくれました」俺はビビる気持ちを押し殺して、せいぜいクールに見えるよう気取った声で言った。
「最初に言っておきますが、データにはコピーがあります。俺が戻らないと公表される手はずになってるんで、この場で俺を始末しても無駄ですよ」
「私はそんな卑劣な真似はしません。貴方と一緒にしないでもらいたい」ピジョンブラッド……いや、今はコスチュームを着ていないから、四十九院明日華は俺への蔑みを隠そうともしなかった。まあ、当然だろう。「……貴方、もしかしてこの間、エストロモンガーの時にいた？」
「おや、覚えててくれましたか」

「どこにでもいて、まるでゴキブリのようね。あの場では私達がいなかったら死んでいたというのに……」四十九院は小さく舌打ちをした。「さっさと用件を済ませましょう。いくら欲しいのです」
「……そういう言い方をされるってことは、お送りした手紙は図星だったということでいいですかね」
「いいえ」彼女は即答した。「あなたのような人との会話にこれ以上時間を使いたくないのです。時間をお金で買うだけのこと」
「はあ、そうですか」俺は頭をかいた。「しかしね、別に俺は金をせびりたいわけじゃないんですよ」
「だったら、何です」声に苛立ちが混じる。
「単に、知りたいだけです。行方不明の子でないとしたら、俺が見たのは一体誰です。あんた、何をやってたんですか」
「呆れたものね。私が答えると思って？」
「記事にはしません。約束しますよ。単なる知的好奇心というやつです」
「話にならないわね。それを信じるほど私が愚かに見えますか」
「俺は何しろ、けちなカメラマンなものでね」俺は一歩前に出た。四十九院の手がわずかに動くが、何も起きない。「下手にあんな写真を表に出して、裁判沙汰にでもなったら勝ち目がない。強請りに使おうにも、魔法使いなんてものを相手に強請り通せる気がしない。けど、せっかく撮った特ダネをそのまま捨てるなんてこともできない。せいぜい自分の好奇心を満足させるくらいしか、使い道を思いつかなかったんですよ」
四十九院は目を細め、値踏みするように俺を睨みつけている。やがて、ほっと肩の力を抜いたのがわかった。
「どこまでも人間の小さいこと。いいわ、正直に言いましょう。あれは〈アペプの褥〉という儀式よ。ある手順を経て、魔術師の精液を採取することで、強い魔力を持った薬ができるのです。房中術というのを聞いたことがない？　それと似たようなものよ」
「あの子供は誰です」
「母方の甥よ。私と同じで魔術師の家系なので、協力して貰っています」
「今もご存命で？」
「当たり前でしょう。貴方が言ってきた事故の子供と、あまり似ているので私も驚きました。未成年なので会わせるわけにはいきませんが、必要ならあとで写真でも戸籍でも見せてあげますよ」
「……魔法で偽造できますな？　どちらも」
「それを言い出しては切りがないわ」四十九院は鼻で笑った。「貴方がとってあるというコピー、これが終わったら消してくれるという保証はどこにあって？」
「違いない」俺も真似をして、鼻で笑った。「やましいことでないなら、俺の呼び出しに応じたのはなぜです」
「外聞が悪いですから」四十九院はあっさりと答えた。「魔術の心得がある者なら、純粋に儀式として必要なことだと誰でもわかりますが、そうでない一般の人には知られたくありません」
「まあ、そりゃそうでしょうな」
俺はポケットからメモリーカードを出して、彼女の方へ放った。「そいつがオリジナルです。コピーは消しておきます」
四十九院は片手で受け止めると、そのまま指でへし折った。
「最後に一つ聞いておきたいのだけれど、あの写真はどうやって？」
俺はビルの屋上のオブジェのことを話した。四十九院の細い眉が上品に跳ね上がる。
「すぐに取り除かなくてはね」
「そうするのがいいでしょうな」
「貴方もね」
言うなり、彼女の瞳がサングラスの奥で赤く光る。逃げる間もなく、俺は組み伏せられていた。
これも魔法だろうか、とんでもない力だ。片手で喉元を押さえられているだけなのに、指一本動かせない。
「……コピー……」息をふりしぼって、やっと言葉を発することができた。「コピー……が……あるぞ……」
四十九院の唇がゆがむ。「教えてあげますが、〈アペプの褥〉という術は本当にあるのです。死者の霊を呼び出して従わせる術としてね。貴方が死んでから、色々教えてもらいましょう」
「他……は……嘘……か」
「……貴方に。貴方に何がわかるというのです」四十九院は空いた片手でサングラスを外した。真っ赤な瞳が、本が読めるくらい明るく輝いている。魔力を使ったり、興奮したりすると光るのだと、どこかの資料に書いてあったのを思い出す。
「私がどれだけ、どれだけ我慢しているか、知りもしないで。たった、たった一つの私の趣味を、こんな風に暴き立てようとする。私だってわかっているのに、いけないことだと。だから、アレをした後は、いつもより頑張って、何人も助けて、救って、それを」
四十九院の声は、何かを吐き出すようだった。「あの子が、エイスワンダーが言ったでしょう。遠くから私達を見物して、応援していればいいものを。よりによって、どうして、こんな下衆な仕事に」
意識が遠のきそうになるのを、必死で俺はつなぎ止めようとしていた。四十九院の口にしたわずかな言葉に、必死でしがみつく。
「……それなんですよ」
「え？」
あの時エイスワンダーに言われたことを思い出す。

俺達はなぜ、人々のために力をふるうヒーロー達を褒めたたえないのか？　エロ写真の題材にし、ちょっと失敗すればすぐ叩き、何もなくてもあら探しをする。なぜ、そんな見方しかできないのか？
あの場では言わなかったが、少なくとも俺や俺の同類に関してならば、その答えははっきりしている。
いかに三流の、底辺の、面汚しだろうと、俺達はルポライターだからだ。ルポライターとは生来、主役よりも脇役に目を向けるものなのだ。
特別な力を持って生まれなかった者達。マスクをかぶって正義のために戦うことを選ばなかった者達。命を懸けて悪に立ち向かったりはできない者達。スーパーヒーローが輝けば輝くほど、その影に埋もれていく者達。俺達が共感するのは、本当は撮りたいのはそういう連中だ。そういう連中が、それでも立ち上がる時、そこに当たり前の人間の本当の輝きがあると思うからだ。
「……つまりね……俺にも、そういう、時が……あるんじゃないかと……思ったんで」
かすんでいく視界が一瞬、真っ白に染まる。聞き慣れた音。シャッターの音。四十九院が顔を上げて呆然とする。俺は首をねじって、四十九院の視線の先を見た。カメラを構えている駒井田の顔を確認して、俺は意識を失った。

病院のベッドで起きられるようになってすぐ、俺はビジョンブラッドがヒーローを引退したと聞かされた。持っていた会社をすべて手放し、静養と称して姿を消したらしい。
「警察は追ってるみたいだけどね。まあ、物証があるわけじゃないから……」
持ってきた大量の新聞を俺の枕元に放り出して、駒井田が言った。どれを見ても「ヒーローの暗黒面」とか何とか、派手な見出しが踊っている。どうやら俺が寝込んでいた間にもう一つ事件があって、あのエイスワンダーが敵に操られて町中で暴れ回ったそうだ。それとビジョンブラッドの一件が合わさって、あらゆるメディアがヒーローバッシング一色に染まっているらしかった。
「おかげで俺達の写真のインパクトがかすんじゃってさあ。歴史的なスクープだったのにな」
「いやまあ、そりゃ別にいいんですがね」
四十九院明日華の言葉を思い出す。結局のところ、彼女の言い分にも一理あったのかもしれない。もし、一人殺すたびに十人の命を救うヒーローがいたとしたら、長い目で見ればそいつは、人命救助に貢献していると言うこともできる。その一人に選ばれた方はたまったものではないだろうが。
「久々に、青臭いことをやっちゃったな」
「たまにはいいじゃないの。人間、そういう気持ちも持ってなきゃあ」
駒井田がテレビをつける。テレビでもなんだか俺達がやってることと同じような、スキャンダルの特番を放送していた。
その画面がいきなり歪む。電波が悪い時みたいに、画面が一瞬ブロックノイズだらけになり、帽子をかぶったちんちくりんの女の子の顔が出てきた。
〈オイラの名はパパラッツォ。こー見えてもれっきとした、プロウジョブのスーパーヴィランでござい〉
俺と駒井田は顔を見合わせる。駒井田は黙ってスマホを取り出し、病室を飛び出していった。俺も後を追おうとして、ベッドから転げ落ちる。たった数日の入院で、体がなまりきっていた。我ながら情けない。
まあいい、どうせ今行った所で仕事があるとも限らない。結局あの写真も新聞社に高額で売れたそうだし、今回はゆっくり休ませてもらうことにする。
俺は首と腰をさすりながら、ベッドに腰掛けなおした。
〈見てるか、エイスワンダー。明日の正午、お台場まで……〉
おやまあ、それじゃまたあの子が主役か。さすがに世界最強のヒロインともなると、イベントにこと欠かないと見える。
それにしてもスーパーヴィランの盗撮屋とは、すごいのが出てきたものだ。いずれ商売敵になるかもしれないし、お手並み拝見といこう。
俺はテレビを横目で見ながら、駒井田が置いていった新聞の一枚目を広げた。

完

平和を守るスーパーヒロイン
二人のエイスワンダー
アテナとクララ親子

狡猾なヴィランの罠に嵌り
親子揃って淫らな調教を
受ける事になってしまった

オラッ腰が引けてるぞママさんよぉ!
娘のめでたい初体験なんだ
お得意の交尾の仕方をじっくり教え込んでやんな!
醜悪なオーク兵へ娘を差し出すように抱え上げ、極太ディルドで娘のケツ穴を犯すアテナ
ピストンの度に、ディルドを通して娘がえぐられる感触が伝わって来る!
ふんっ!ぜ、全然大した事無いわ!ね、ママ…!
そ、そうね!
だが、どんな絶望的な状況でも二人のエイスワンダーは諦めない!
負けるなエイスワンダー!

MOSTDANGEROUS
Takasugi Kou

DEEP THROAT
BLACK ARTEMIS
悪堕ヒロイン
最高です・・・!!
by ICE
@seriousgraphc

DRINK OR DIE
チバトシロウ
んだオラァ！
ワンダーなんざ5分でイカしてやるって息巻いてただろ!?
あたしくらい10分でイカせらんなきゃ
話になんねーぞボーヤ!!
だらしねェ！

ワンダーをよがらせたかったら…
もっと腰立てなっフニャチン!!
あたしの子宮口をテメェのナニで…

掘削する気で打ち付けるんだよ！
オラオラッ！
そうすりゃ…ワンダーだって…
ワンダーだって…

エイスワンダー…

お前はどこに行っちまったんだよォォ!!

キュウウウ

ビク ビク

うっ!

ビュッ

ビュル

あたしゃ…あたしゃぁ…

マスター!!

樽ビール!!

あとお嬢ちゃんらにジュース

姐さん…

ここはラブホじゃないんですがねェ…

ポロ

ポロ…

ドッ

アルテミスは恋をしない

神野オキナ

わたしは、けがれてしまった。

うつくしいてんくうのめがみのしまからやってきたとき、わたしはけがれないうつくしいからだだった。

おねえさまたちはやさしかった。

あてな、ぜのびあ。

でも、ぜのびあはあくにおちて、あてなはげかいでこどもをはらんだ。

かいらく。

げかいにはかいらくがおおすぎる。

いやらしい、みんないやらしい。

せっくす。おなにい。

くにりんぐす、ふぇらちお。いらまちお。

あなる、ヴぁぎな。くちびる、わきのした。

すべてのばしょで、かいらくがえられる。

わたし、いたいことはへいき。

でも、きもちいいことはだめだった。

あてなおねえさまのしたで、まんこをなめられたとき、わたしはかいらくにふるえて、あえいで、はじめていっちゃった。

しんじられないほどきもちよかった。

そのおもいでだけをかかえて、わたしはもとのめがみのしまにかえるはずだったのに。

ぜのびあが、わたしをまっていた。

むっつののうりょくしかかいかしていないわたしは、あっというまにぜのびあにつかまった。

せいいをとかされ、でいるどーにされた。

あとは、おまんこをおかされた。

あなるのなかをぶちまけ、おしっこもぶちまけさせられた。

そのあと、あなるをおかされた。

いっしゅうかん、とおか、みっか？　わすれた。

でもしにそうになりながら、わたしはきもちよかった。

きもちよくなって、きもちよくなって、きもちよくなって、きもちよくなって、

もっときもちよくなりたくなった。

きがついたら「だめ」じゃなくて、「もっと」とさけんでいた。

あかちゃんみたいにさけんでた。

はずかしい。わたしはちせいと、かりと、びのめがみなのに。

でもおまんこきもちよかった。

おっぱいも、おしりのあなも。

おかされて、からだをうごかされるたびに、おちんぽがえぐるたびに。

まんこがぬれたの。しにそうなぐらい、きもちよかったの。

だから、ぜのびあのめいれいにしたがった。

あてなおねえさまをつかまえたの。

おねえさまは、わたしのてくびぐらいあるでいるどーで、おかされて。

あえいで、わたしとおなじになっていった。

それがうれしかった。

これで、みんないっしょ。わたしたち、あのめがみのしまとおなじ。

きもちよかった。

にくよくはすてき。

せっくすのかいらくはもっとすてき。

もっとほしい、もっと、もっと、もっと……

でも、けっきょくすべておわった。
あてなおねえさまはもとにもどった。
ぜのびあはうちやぶられた。
わたしは？
わたしはどうすればいいの？
あてなおねえさまより、はるかにおとるはずのくらにたおされた。
やっぱり、わたしはむっつしかのうりょくがかいかしなかったはんぱものなんだ。
だから、もうやくにたたないから、ぜのびあからみすてられた。
あてなおねえさまのところへも、めがみのしまにもかえれない。
わたしはけがれてしまった。
そう……穢れてしまった。
私は、穢れて、快楽をあさましくむさぼり、無数のオークに犯され、男とも女とも、そして時には人外の存在や獣とまで肌を重ね、あらゆる道具、あらゆる肉欲を注ぎ込まれ、体液を流し込まれて牝の快楽を覚えてしまった。
私は二代目エイスワンダー、クララの手で、雪山の中にたたき落とされた。
私はもう、死んでいたのと同じだ。
私は聖衣を失い、純潔も失いもう、女神にはなれない、もどれない。
私のかつての名は、アルテミス。
あの輝ける、偉大な初代エイスワンダーの……妹だと、かつて思い込んでいた愚かな牝犬だ。
六つまで開花した女神の力は私にはもう微笑まない。
だとしたら、このまま凍死することも可能だろう。
果てしなく冷たい雪山の中、私は永遠にここで眠り続けようと目を閉じた。

★

どれくらいの時間が過ぎたのだろう。
気がつくと、まぶた越しに明るい光。
目を開けると、そこはどこかの地下室らしかった。
コンクリートむき出しの壁と床、つり下げられた舞台用照明。
反対側の壁にはずらりとモニター類が並び、あちこちに武器の治まったコンテナがある。
私が寝かされているのは手術台のようなものらしかったが、手術道具らしいものは見えない。
そして、部屋の奥には大きな机があって、その上に、細い肢体をスーツに包んだ少年がその上に腰掛け、長い脚を組んで微笑んでいる。
「やあ、おはよう、アルテミス……でいいんだよね」
冷笑的な笑顔と共に、少年が言った。
一見すると少女に見える。
だが、私の呪われた女神の力の残滓は、彼の骨格と……ペニスから放たれる精液の匂いを感じ取っていた。
あさましく喉が鳴る。
発情が始まっていた。
「ねえ……あなた……オナニーしてたの？」
わたしはゆっくりと手術台から降りた。
「うん、そうだよ」
少年はあっさりと肯定した。
「だって君、エロい身体してるもの。あそこから掘り出して、服を脱がせて、風呂に入れて、そこに寝かせてから……えーと二回かな？　覚えてる？　気絶した君に一度握らせたら凄く丁寧にしごいてくれた」
「覚えてるわ」
ふらふらと立ち上がりながら私は舌で唇を舐めた。
もちろん、そんなものは覚えていない。
でも、きっとそうしたのだろう。
私は淫乱な雌犬に堕したのだから。

ブロウジョブでもオークたち相手にそうしていた。
場合によっては機械の触手や、洗脳用の誘淫植物の触手に、犬や獣たちにまで。

この子のペニスはどんな形なんだろう。

ピンク色の霞が掛かった頭はそれだけを考える。
どんな味？
先走りの匂いは？
細い身体だけど引き締まってる。
浅黒い肌に、金色の髪。
私はこの子を抱く。
この子はきっと童貞だ。
女の匂いがしない。
でも代わりになにか薬と……くすりと……。

ああ、どうでもいいの。

この子の上にまたがりたい。
またがって、ペニスをまんこに飲み込んで、腰をじょうげにうごかすの。
まんこでぺにすをしぼりあげて、のみこんで、まんこにだしてもらうの。
せいえきを、ざーめんを、ざーじるを。
こだねじるを。
「……ばーか」
少年は冷たい無表情になった。
「発情なんかするな、話を聞け」

ふっと、身体の熱が消える。

「……ったく、ホントに君、あのエイスワンダーの従姉妹なの？」
「何を……したの？」
「別に？　ナノマシンをちょこっとね」

「なんでそんなことをしたの！　元に戻して！　私は穢れた雌犬なの！このまま永久に精液便所として生きて、死ぬの、勝手に身体をいじらないで！」
「うっさいなぁ」
面倒くさそうに少年は口をへの字に曲げた。
「！」
昔なら説得をしただろうけど、すでに堕落しきった私は彼を殴って自分の言うことを聞かせるという選択肢に躊躇が無かった。
女神の六つの力はもう微笑まないだろうが、格闘能力ぐらいはまだ残っているだろう、という漠然とした確信はあった。
拳を振りかざし、殴りつけ……その拳が停まる。
「ああ、ついでにいくつか行動選択における条件洗脳もしておいた。君は僕を殴れないし、それ以外の攻撃……えーと、目からの光線とかも使えない。そして僕の命令には『良心の範囲』で従う」
「どういうこと？」
「結構難しかったんだぜ？　ブロウジョブみたいに何でも命令を聞く、じゃないように調整かけるのって……君たちの脳の構造が僕らと変わらなくて良かったよ」
「あなた、何者なの？」
「元犯罪者、今はヒーローになるべく準備中。なおヒーローネームはブルー・スカルを予定しております」
少年はしれっとした顔で言った。
「つまり、ヒーローのふりをしてまた犯罪をするってこと？」
首を傾げる私へ、彼はまるで年下の少女に噛んで含めるかのように、
「違うよ。僕は心を入れ替えたんだ。本当のヒーローになる」
と言った。
「自分が何を言ってるか判ってる？」

「ああ、判ってますよー」
少年はニヤニヤ笑いを止めずに答える。
「人間どこからだってやり直しは出来るさ。実行までに支払う代価が増えていくだけ……で、多分今が僕の支払える代価の限界だから、やってみようと思っただけ」
「私が手伝うとでも？」
「ブロウジョブの一員になったからって、必ず悪いことをし続けなきゃいけない理屈はないだろう？　それに、悪党には『裏切り』が必須じゃない？　まあ、この場合は『表返り』かな？」

「馬鹿にしないで！」

私は毅然と踵を返した。
怒りの余り正気に戻った私の超感覚は、ここがすでに地上で、今が夜であること、住宅街であることも理解していた。
だとすれば、どこかに服が干してある……いや、盗みなんて小さな悪事を働くより、強盗に入ってしまえばいいではないか。
どうせ私は薄汚れた女、女神になり損ねた淫売なのだから。

少年は私を引き留めなかった。
自動でドアが開き、私は久々の夜空に向けて地を蹴った。
飛び立つと、地下室がかなり大きな豪邸の地下にあることが分かる。
皮肉にも、私の中の女神の力はまだ存在してくれているらしい。

私は夜空へ向けて飛び出した。
だが、空を飛ぶことでかつて感じていたときめきも、心の解放もない。
ただ、空虚だけが胸の中にあった。
それを満たすことが出来るのは精液と愛液、そして淫らな欲情の匂いと、私の膣内で蠢く快楽の道具たちだけ。
☆
一週間後、私は「彼」の居場所を見つけた……いや、見つけたも何も、「彼」は最初に出会った場所にそのままいた。
あの豪邸の地下室に。
「やあ、お帰り」
またも自動で扉は開き、コーヒーを飲みながら少年は私を笑顔で出迎えた。
「私の身体に何をしたの！」
「ああ、セックスしようとしたけど出来なかった？」
「……！」
あまりにも露骨な言葉が整った顔から発せられると、流石に私も一瞬ひるんだ。
その通りだ。
あれから私は何とかセックスをしようとあちこちの街角に立った。
明らかに危険な男たちがたむろする場所にも足を踏み入れた。
だが、胸は高鳴らない。
精液の匂いも、男たちの体臭も――――かつてあれだけ胸を焦がした物が、全てただの無意味な……嫌悪感すら抱けない、別の何かに化けていた。
私の子宮は熱を帯びることはなく、女陰は一滴の愛液の分泌をすることもなくなっていた。
だが、頭の中はセックスを求めている。
したい、したいと叫んでいる。
それなのに、セックスが出来ない。
普通の人間の男性は……いや、たとえ超人と呼ばれる人間であろうとも、年齢や病気によって不能になるという。
おそらく、今の私は同じようなものだ。
愛液の代わりに市販のローションを使ったりもしたが、何もかもが駄目だった。
ローションでヴァギナを濡らして中に導き入れても、ペニスはかつてのような快楽を私にあたえなかった。
膣内に入っている。動いている、それだけだった。
どんな道具もそうだった。
思いあまって削岩機の類いまで、私は股間に挿入した。
でも、やはり、快楽は訪れてくれなかった。
それなのに、頭の中ではあのしびれるような感覚への渇望が停まらない。
私は三日目にそれに気づいて泣いた。
余りの衝撃に泣きじゃくった。
二日ほどして、ようやく頭の中が整理できた。
だから、少年を殺してやろうと思った。
この怒りなら、少年を殺せると確信して、私はスキンタイトなキャットスーツにジャケットを羽織った姿で少年の元を訪れたのだ。
「そうよ、セックスできないの！　何をしたの、私の身体に！　あのおかしな洗脳以外に！」
「僕以外の男や女とセックスできないように」
「！」
頭に血が上って、視界が真っ赤に染まるかと思うほどの怒りが私の中を満たした。
私は拳を握りしめ、まっすぐに少年の顔面に打ちこむ。
数千分の一秒。
それだけあれば、少年の顔面は真っ赤な煙に変じて、そのまま背後の壁にスプレーされるだろう。
少年と、目が合った。
数万分の一秒。
私の魂は、少年の目に吸い込まれた。
刹那、すべてが終わった。
拳が少年の顔の前で停まり、衝撃波が周囲の壁に跳ね返り、テーブルの上のコーヒーカップを宙に舞わせて粉砕する。
ほんの一秒、私は少年の顔を睨んでいたと思う。
そして、私はそのまま膝を突いた。
「お願い……」
目から涙が溢れた。
理性は抵抗と反逆を訴えていたが、本能は理解していた。
ちがう、少年の甘いデオドラントの混じった体臭を嗅いだ瞬間から、全て決まっていると受け容れていた。
私は、もうこの少年のものなのだ、と。
なぜなら、少年の声を聞き、その体温を感じ、鼓動を感じ、体臭を嗅いだ瞬間から、私は発情していた。
タイツ状のスーツに包まれた股間で、失われ、忘れ去られかけていたあの熱い飛沫が迸り、心臓は早鐘を打ち、乳首が尖っていくのが分かる。
乳房に熱が送り込まれて、ひとまわりも大きくなる感覚。
ああ、セックスが出来る、セックスできる、せっくすできる。

「お願い……ハメて……私の、私の……ま○こにハメて……」

私はそう言って、コンクリートの床に仰向けになり、「M」の字の形に両脚を広げ、タイツ一枚に包まれた股間を指で広げた。

それだけで冷たい空気がヴァギナの中に入り、それがまた背筋を快楽になって走っていく。

「何を？」

少年は楽しそうな目で問う。

「あなたの……おちん○んをペニスを、チン○を、私のま○こに突き刺して、ずぼずぼしてぇ！」

私はかつて身体に刻み込まれた記憶のままに叫んだ。

「お口にも、アナルにも、全部の穴をあげるから、全部犯してぇ！」

「素敵だよ、アルテミス」

くすっと少年は笑った。

「今日から、君は僕の、僕だけの牝犬だ」

微笑みながら、不思議に温かい声で、少年はそういった。

少年の爪先が、私のヴァギナの上に置かれ、じりじりと左右にこじられる。

それだけで私ははしたない嬌声をあげてよがった。

「誓え、アルテミス。この指輪にかけて」

少年はそういって左手をかざした。

細い指先に、真紅の輝き……

「どうして、それがここにあるの？」

私たちの国で、地上に降り、国に帰らず結婚することを決意した者が、その決意のために使う指輪。

同じものが、少年の薬指にも填まっている。

「誓いの指輪」とも「永遠の指輪」とも言われるそれは、しかし全ての制度が緩くなったこの数百年、地上にもたらされ事はないはずだ。

エイスワンダー……アテナお姉様だって、それを使う事はなかった。

「誓え、アルテミス」

「……はい」

私は、頷いた。

「私は……アルテミスは、私のま○こもアナルも、お口も、おっぱいも、お尻も、足も手も、髪の毛一本、細胞の欠片にいたるまで、あなたの為に存在する牝犬です」

すらすらと、これまでブロウジョブの連中に言うように強制されてきた言葉を組み合わせたものが口から流れ出た。

指輪は金色に灼熱する。

「さあ、これが僕と君との永遠の絆だ……何処に欲しい？」

私は一瞬迷い、股間を高々と突きだした。

「ここに……クリトリスに、下さい」

少年の笑みがますます深くなる。

「分かった、あげよう……淫乱で、綺麗で可愛い僕のアルテミス」

微笑む少年の指先で、完全な輪だった指輪の一部が欠ける。

そうだ、「誓いの指輪」は必ずしも指輪として使う必要はないアイテムだ。

ある女神候補生は臍に、ある女神候補生は耳に、ピアスとして装着していたという記録がある。

私は……私は……股間の、恥ずかしく勃起した快楽の固まりを選んだ。

「あなたは……誰？」

私はどぶどぶとあふれ出す愛液がさらに股間から太腿を伝っていくのを感じながら、私は初めて少年の名を聞いた。

「僕の名は世持（よもつ）ヒロヤ。そしてブルー・スカル」

「分かったわ……ヒロヤ様……私に、凄いのを下さい、下さい……」

灼熱した指輪が私の敏感な快楽の芽を左右から貫き、その瞬間私は「戻れない場所」に到達したという奇妙な達成感と、もう何も考えなくていいという安堵の入り交じった快楽に脳まで焼かれ、絶叫しながら失禁した。

ひぃ、とかひひゃあ、とか変な声で呼吸しながら、私はクリトリスを貫通された痛みが快楽に変換されることが嬉しくて、涙まで流した。

「お願い……ヒロヤ……様、ちん○をください、わたし、あなたの物になりました、だから、だから……」

プライドも何も無い。ひたすらセックスが欲しかった。

少年は無言で頷き、ズボンのファスナーを下ろした。

身体に見合った、可愛らしいサイズのペニスがまろびでる……そう思っていた私だったが、少年が数回それをしごくと、皮を押しのけてぐいぐいと大きくなったそれは、私の見たどのペニスにも負けない大きさと、節くれ立った血管を浮かび上がらせ……それだけではなく、あちこちに小さなベアリングのようなものが埋め込まれている。

「今まで、薬の実験で色々使ったから、普通の女の人じゃだめなんだ……」

初めて、少年の顔が上気し、目の中に私と同じ快楽に狂い始めた者がみせる色が浮かぶ。

「ナノマシンとか、そういうので、精液も酷いし…

…アルテミスお姉さん、僕の童貞、貰って」
「童貞……なの？」
「……そうだよ、ずっとオナニーだけだった」
私の胸は怪しくときめいた。
これまで、童貞を招き入れたことはない。
これだけのペニスを持ちながら、未だに女を知らない身体。
「だから、気絶した私の身体でオナニーしてたの？」
こくんと頷く少年は、年相応のあどけなさ。
「いいわ、貰ってあげる、あなたを私にあげるから、私はあなたの童貞を貰う」
「ここで……いい？」
「ええ。突き入れて……ま○こ、ぶちこわしてもいいから」
「うん」
頷いた途端、圧倒的な質量をもつものが、私の中を満たした。
後は、どうなったのか覚えていない。
私は少年にしがみつき、少年も私にしがみついた。
ありとあらゆる卑猥な言葉を叫び、卑猥な格好をし、卑猥な部署を見せ合い、舐め合い、犯しあったと思う。
だが……今思い起こしても一番混乱するのは、私はその中で「愛してる」という言葉を使ったらしい、ということだ。
何度もその言葉を少年は叫び、私も一緒に唱和し……その度に、これまで感じたことのない快楽が脳を焼いた。
やがて……全てが白くなり、私たちは身も心もひとつになって消えた。

☆

気がつくと、私は全裸でガラスの回廊の中にいた。
どこかは分かっている……私は気を失い、結果、夢とも現実とも点かぬ深層心理の世界にいるのだ。
これまで、精神集中によって一瞬この回廊に足を踏み入れることはあったが、こんなにのんびり眺められる状態は初めてだ。
理由は分かっている。
私は快楽に没頭するあまり、ついに無我の境地に近い、少年との精神融合を果たしていたのだ。
八つの力を解放することで我らの女神の女王になれる、というが、私はこれまで六つまでしか解放できなかった。
こうして七つ目を解放するとは。
精神融合がセックスの最中に出来るなんて、聞いた事もなかった。
恐らく、少年――――世持ヒロヤの仕込んだナノマシンとか「誓いの指輪」の影響だろうか。
ただし、女神候補生である私と、ヒロヤとでは精神的な容量が違うから……と思ったが、精神の風景には私のこれまでの風景も入り交じっていた。
アテナお姉様やゼノヴィアと楽しく遊んでいた子供の風景に微笑み、アテナお姉様とシックスナインで一方的に愛されてしまった記憶に赤くなり、聖衣を悪用され、快楽に狂って悪事を重ねる己の姿に嫌悪し……ガラスの回廊の彼方、見たことのない風景が拡がっているのに気づく。
足下を見ると、私のすぐ下、上下逆に全裸のヒロヤの姿があった。
何をしているんだろうと思った瞬間、無我の境地のありがたさで応えがすぐに出た。
あちらはどうやら私の記憶を見ているらしい。
だとしたら、私の先にあるのは……ヒロヤの記憶だ。
産着にくるまれた子供の視線が、初めての産湯を使う風景が最初にあった。
両親と兄と姉、祖父母という、今となっては珍しい大家族。
幸せそうな両親の顔、弟をのぞき込む姉と兄の顔。
やがて少年は天与の才を示した。
あっという間に高校を卒業し、十歳で大学を卒業する。
将来を嘱望される天才という賞賛。
ブカブカの大学の卒業用の制服と制帽姿の少年に私は思わずくすりと笑ってしまった。
そんな彼を見て、家族も微笑む。
温かい、幸せな家庭。
頭でっかちになりがちな少年のメンタリティを、姉と兄は補い、祖父母は無償の愛と世間の不条理を論し、両親は愛情と正義を教える。
少年の手には、いつもヒーローの人形が握られていた。
スターゲイザーなどの現実のヒーローではなく、テレビの中の、それ故に完全無欠なヒーロー。
髑髏の仮面にスーツを纏った、クライムファイターと呼ばれる人間がヒーローに扮装したタイプのキャラクター。
IQ200に近い天才少年が、そんなものを無邪気に憧れの対象として持っているのは微笑ましい。
少年はまっすぐな人間に育ちつつあった。
少年が大学を卒業し、博士号を取得して、医療機関の研究員になったのを機に引っ越した彼らは、新しい生活を始めるべく、荷ほどきをしている。
最初の異常は、祖母に出た。
荷物の入ったダンボールの箱をカッターで開けていた彼女が突如、手首を押さえて苦しげに倒れる。

救急車のサイレン。

ICUに入る祖母。心配そうな家族の端っこに、彼も……ヒロヤもいた。

母の顔がみるみるガラスのように透き通り、亀裂が入って砕け散るのを、私とヒロヤは呆然と見つめていた。

クリスタルクラッシュ症候群。

聞いた事があった。

すでに絶滅した、とある宇宙生物が原因で発症する特殊な遺伝子病で、数十億人に一人の割合で発病するが、ひとり発病すると、必ず三世代にわたって連鎖する。

つまり、祖父から孫まで。

別名をファミリー・スラッシャー。

いつの間にか、ICUに横たわるのは祖父になり、母になっていた。

首を横に振る医師にくってかかる父親、泣きじゃくるヒロヤを、姉と兄が抱きしめている。

やがてやつれ果てた父が、心臓を抑えて倒れる。

費用を作る為の奔走と、看病のストレスからくる過労死だった。

ヒロヤは勤めていた医療研究機関に治療法の研究ラボの設立を訴えたが、余りにも発症例が少なすぎる奇病故、採算が取れないと突き放された。

やがて、兄も倒れた。

次は自分かも知れない。

ガタガタ震えるヒロヤを、姉が抱きしめる。

「心配ないよ、ヒロヤ」

姉は寂しげに微笑んだ。

「あんたは、絶対に発病しないから」

その言葉の意味を、ヒロヤはがらんと広くなった自宅の片隅で理解する。

中学にあがる為の戸籍謄本。

そこに、ヒロヤは「養子」として書かれていた。

振り向くヒロヤの前に、ICUに横たわる兄と姉。

ヒロヤは戸籍謄本を握りつぶすようにして、決意する。

何が何で兄とも姉を助ける。

ずっと大事にしてきたヒーローの人形が、病室のゴミ箱に棄てられる。

少年は医療機関を辞め、父の僅かな遺産を元手に、「事業」を始めた。

ありとあらゆる薬……麻薬と呼ばれるものを中心に、特許権を侵して安く、しかもオリジナルより高性能の医薬品に至るまで……の密造と販売。

中学生の少年は何度も殺されかけ、危険な目に遭いながらも、組織を作っていった。

少年自身も身を守るためとはいえ、人を殺した。

泣きながら、それでも少年は残った家族を救うために、「仕事」の合間にクリスタル・クラッシュ症候群の研究と治療薬の開発に、それこそ寝食を忘れて熱中した。

全ては残った家族を救うために。

本物の家族ではない自分を育ててくれた本物以上の家族の為に。

姉と兄の入ったICUは、豪華な医療設備を整えた専用治療室に変わっていく。

だが、兄が弾けて消えた。

姉の手足もゆっくりと透き通っていく。

その横で、ヒロヤは必死になって、歯を食いしばって研究と仕事に邁進した。

だが、終わりは来る。

少年が十六歳になった年。

クリスマスの夜景が見たい、と姉の唇が動いた。

疲れ果てた、遺伝子強化された身体に、さらに薬物をぶち込んでかりそめの元気を埋め込んだ弟は、にこやかにそれに応じる。

もう助からない、と分かっていても、少年はまだ戦うつもりだった。

この世の富を全てつぎ込んでででも、残った最後の家族だけは救う、と決めていた。

だが同時に、助けられない、ということを理性は理解していて、ヒロヤという少年はその間で引き裂かれそうになっていた。

「ヒロヤ」

首まで透明になっていた姉はまだうっすらと肌色の残る手をさしのべた。

ヒロヤはうっかり握り砕かぬように、そっとその手を取る。

「あんた、もう無理しなくて、いいよ」

姉は微笑んだ。

「あんたは正義の味方になりなさい。ちっちゃな頃から憧れてたでしょ？」

そう言って、姉は優しく微笑んだ。

「今まで、アタシたちのためにありがとう。ヒロヤ……でも、もういいんだよ」

「違うよ、姉さん！　まだ諦めちゃいけないんだ！大丈夫、きっと上手くいく、今作ってる薬が……」

思わず声をあげるヒロヤの唇に、そっと姉は人差し指を当てた。

「これは、運命なの……アタシのね。だから、あんたはあんたの運命をこれから精一杯生きなさい。ヒロヤ」

微笑む姉の顔にまでガラス化が進んだ。

呆然と目を見開くヒロヤに、姉は最後に言った。

「犯罪者じゃなくて、ヒーローになりなさい。あんたはそれが出来る……私の分まで、ヒーローして」
砕け散る姉の姿。
空っぽになったベッドの前に、喪服を着けて立ち尽くすヒロヤは、最後に姉の枕を抱きしめる。
その足下に、何かが転がり落ちた。
棄てたはずの、ヒーローの人形。
骸骨の仮面を被った、スーツ姿のヒーロー。

涙があふれ出した。

少年の目からも、私の目からも。

展開される記憶。

まだ元気だった頃、中学生の姉が、大学を飛び級で卒業したばかりの十歳のヒロヤの隣りで、初代エイスワンダーのドキュメンタリーを見ている。
「あたし、絶対将来スーパーヒロインになる！」
目を輝かせて姉は言った。
「お姉ちゃん、超能力ないじゃないか」
きょとんとした顔で少年は訊ねる。
「まあ、お前の場合サイドキック（相棒）がせいぜいだな」
野球好きの兄が笑った。
「いいもん！　サイドキックでも！　NUNDEとかに入って、正義のために働くもの！」
「そのためにはもう少し、学校の成績が良くならないとねえ」
クスクス笑いながら母親がいい、「それ言わないでよー」と頬を膨らませる姉の姿。
そして、今と殆ど変わらない姿になったヒロヤが、ネットの情報を開示している。

驚いたことにその中には、NUDEのものも含まれていた。
あの鉄壁のファイヤーウォールをどうやってくぐり抜けたのか、と私が呆れていると、彼はエイスワンダーの資料に突き当たった。
初代のアテナ姉様、そしてその娘、クララのことも。

「……違う。彼女たちじゃない」
立体映像で周囲に展開されたふたりの資料をしばらく眺め、ヒロヤは追いやるようにスクロールさせた。
「彼女たちはまっすぐに輝きすぎる。僕に必要なのは、影を知っている、そこから立ち上がろうともがいてる人だ」
枝葉が情報から伸びていて、私の資料に繋がっている。
驚いたことにNUDEは私が地上に降りてきたときから追跡調査を続けて来たらしい。
全てがそこに書かれていた。
さらにあの、浅ましい姿に成り下がった私の姿まで。

ヒロヤは何度も私の資料を見た。
首を捻り、紅茶を飲み、また見直す。
別のヒロインの資料もみていた……何故かその中にNUDEの司令官、ハンナのものもあったが。
「……彼女だ」
やがて、頷いて満面の笑みを浮かべる。
「僕の生涯のパートナー、命を預ける相手、ようやく見つけた。彼女こそが僕のサイドキックだ！」

私は、その満面の笑みを浮かべるヒロヤを、ぽかんと見つめていた。
私を……選んだの？
「そうだよ」
振り向くと、全裸のヒロヤが立っていた。
「なるほど、セックスの果てに、僕ら精神融合したみたいだね」

驚いたことに彼はこの状況をすでに把握していた。
普通の人間なら夢ですませてしまうはずだが、それも不思議ではない、と今の私は思う。
「説明する手間が省けたよ。まあ、こういう事情で僕は人生をやり直すために、あとは徹底して君と、君がやって来た『見えざる天空の国』（ハイパートピア）のことを調べ上げて、例の指輪を見つけ出し、冬山から君を掘り出した」
「あなたの組織はどうなったの？」
「円満解散だ」
少年は肩をすくめた。
「部下たちにはみな正業に就くように言って金を渡した。出来ない奴も三割ぐらい居るだろうけど、そうなったとき、僕らの前に現れたら遠慮なく『処置』する」
「その処置とやらには殺人も含まれるの？」
「場合によっては。なにしろ僕は不死身じゃないし、遺伝子強化されているとはいえ、弾丸が当たれば死ぬからね……で、その確率を下げるためにも君が必要なんだ」
「私は動く盾？」
「そう。そして僕の牝犬」
言われて、私は身体が真っ赤になるぐらい恥ずかしくなった。

今の私はいわゆる純粋理性の状態にあるから、肉欲に左右されない。
そのはず……なのに、「僕の牝犬」と言われた瞬間、なんと言えない甘い電流が身体を駆け抜けたからだ。
「どうして、私を選んだの？」
「君が、正しいことを行える人だから」
「違うわ、私は……」
言いかけた私の唇に、少年は人差し指を当てて黙らせた。
「今の君が堕淫を望むのは、自分自身の弱さに絶望したからだ。だからこそ、堕淫に救いを求めた。救いを求めるってことは、本当に自分がやりたいことが出来ないから」
「本当に私がやりたいこと？」
「正義の為に戦い、人々の笑顔のために力を振るうこと」
「無理よ、私は……汚れてしまった、淫らな浅ましい牝犬になった。女神の力も私を見放した」
実際、あれから強靭な肉体と飛行能力以外の自分の能力を試してみたが、六つまで覚醒した力の内、四つまでは失われていた。
「そんなことはないさ。どんなに穢れても、汚れても、そこから立ち上がれるものが本物だ……君の能力に鍵をかけているのは君自身だ、今ようやく確信できた」
「私は偽物よ」
「本物になればいい」
まっすぐに私を見つめる少年の目は、どこかで見覚えがあった。
クララを連れ去ろうとした私と戦い、見事に私をイカせて勝ったとき、自分が何故汚れきった人間世界に居続け、ヒロインであり続けるのかを語ったときのアテナ姉様の目。
「前にも言っただろ？　人間はどんなに間違っても、どこからだってやり直しは出来るさ。思い定めてから実行までの間に支払う代価が増えていくだけで」
薄っぺらい言葉だと思った言葉が、今、別の意味で私の耳に響く。
「でも、私はセックス中毒の淫売なのよ？」
「何かに依存したり、辞められないのは悪いことじゃない。コントロール出来ればただの個性だよ。それに、僕もセックス好きだし、僕につきあえるぐらい頑丈で淫乱なのは君ぐらいだし……あ、でも二代目エイスワンダーのクララか、ハニー・ザ・ハガーは予備の候補に入れてもいいかな？　でも、やっぱり君がいいや」
「ど、どういうことよ！」
いきなり他の「予備」があると言われて私は声を尖らせた……同時に気づく。
私は彼を欲しているのだと言うことに。肉体だけでなく、心も。
「第一、ハニーはガチのレズっぽいし、そろそろ性欲に目覚めそうなエイスワンダー二代目もいいけど、彼女の場合、お母さんが怖いからナァ」
「あのねえ！」
ちょっと本気で怒ろうとした私に、少年は手を振ってニヤリと笑った。
すべて冗談なのだとようやく悟る。
「さあ、後のことは目覚めてから話し合おう。君にも僕にも新しい『顔』と『名前』が必要だしね。僕はこの前言ったとおり、ブルー・スカルって決めてるけど」
「ブルー・スカル（青い髑髏）？」
記憶の中の少年が握りしめていた人形は、銀色の髑髏の仮面を被っていたはずだ。
「好きなんだ、青」
そこが個性という所なのだろう。
「じゃあ、私はさしずめブラックなんとかね」
「どうして？」
「今の私には黒が相応しいから」
そう言って、私は胸のときめきを感じながら、頭ふたつは低い少年の身体を抱きしめ、キスをした。
間違いなく私は指輪無しで、この少年に特別な感情を抱いているのを自覚する。
意識が現実世界に戻っていく。

☆

あれから、一年以上が過ぎた。
「月影先生、おはようございます！」
「おはよう、如月さん」
女子校の校門に立った私は、にっこりと微笑んで朝の挨拶に応じる。
交通事故に巻き込まれて意識不明のまま一ヶ月入院してた、という苦しい言い訳も、ブロウジョブが引き起こした（今のところ）最後の騒動に紛れた上、これまでの杓子定規で大真面目な月影テルミの人望（？）のお陰で納得され、私はすんなり教師として復帰していた。
そして、世界はそれなりの平和を取りもどしていた。
「ねえ、また『ブルー・スカル』みたいよ、この前の麻薬組織の壊滅事件」
「あ、見た見た。凄かったね、麻薬密輸の潜水艦を沈めちゃったんでしょ？」
「相棒（サイドキック）の『ブラック・ボーン』って誰か見た？」

「今回ももの凄い速度で動いてカメラに映ってなかったって」
「あたし一瞬だけ、沈む船のマストの上で停止してるの見た！」
「あー、あたしも、なんかロングヘアでもの凄いプロポーションしてたよね！」
「珍しいわよね、拳銃使いのヒーローと、超能力持ちのサイドキックって。フツー、逆だよね？」
「そういえば『ブラック・ボーン』って『ブルー・スカル』のことを『ご主人様』って呼ぶんだって！」
「へえ、主従関係なのかぁ」
ヒーロー好きな生徒達の声を、私は七つの力（彼の言うとおり、私がヒーロー稼業を始めると、封印されていたはずの残り四つと、さらに精神感応で得たものも含め、七つの能力が使えるようになっていた！）のひとつである超感覚で聞き取って、思わずくすぐったい気分になった。
私たちは今のところ上手くヒーロー稼業を続けている。
私の拳はもちろん、ブルー・スカルのショルダーホルスターに収めたルガーとかのクラシックなヨーロッパの自動拳銃（オートマティック）の出番は殆どない。
特に彼の推測と推理力は端倪すべきものがあって、恐らくだが、MI-X のブレインストームと同等か、悪事を実際に行っていた分、上かも知れなかった。
とはいえ、殆ど荒事がないわけではない。
昨日の夜のような派手な騒ぎは久々だったが、それだけに暴れがいもあったし、達成感があった。
それに、今度のコスチュームは頑丈だ。聖衣のようなエナジーランスは使えないけど。
ヒロヤは莫大な資金を投入してあちこちに秘密基地と特殊装備を作り、それは私の新しいコスチュームにも生かされている。
非常に腹立たしいが、彼は確かに天才らしく、今の私のコスチュームは超音速による移動程度では燃えもしなければ、数発のミサイル攻撃で破れる事も無く、マスクも呼吸を妨げることはないし、視界を遮ったりもしない。
そういう意味ではエイスワンダーのコスチュームよりもいいかも。
何よりも独特の繊維表面の反射が NUDE の顔認証システムを完全に誤魔化している。
唯一の問題は、このところ毎日のような少年とのセックスのせいか、ますます胸が大きく、腰が細く、しかし太腿はむっちりという淫らになってきた身体のラインがくっきり分かること……と昔の私なら言ったかも知れないが、セクシーな衣装も今の私は抵抗がない。
それに新しい、スーパーサイドキックという「役割」は結構楽しい。
ヒロヤことブルー・スカルは莫大な資金と、その明晰（と呼ぶのも謙遜に入りそうな）頭脳で次々と悪党を退治していた。
あらゆる罠や巧みな犯罪計画、あるいは犯罪者やスーパーヴィランたちの心の動きや思考を全て、彼は正確に見抜いて、私は大抵、彼の側に立って護衛しながら、彼に素人同然の助手のように頷いたり質問したりするばかりだが、それはそれで、優秀な弟を見守る姉のような気分になれて楽しい。
さすがに現場で何度か顔を合わせているアテナ姉様は私の正体に気づいているが、今のところ知らん顔をしてくれている。
何故かクララだけは私の正体に気づいてないらしい……なるほど、確かにアテナ姉様が「あの子にはもっと地上で学ぶべき事がある」というのもうなずけた。
なによりも……私の大事なヒロヤ、ブルー・スカルを「悪い子じゃない」と言ってくれた。
それだけで私は救われた気持ちになっている。
始業チャイムが鳴り、生徒達が教室に急ぐ。
私も（重そうな物を難儀して動かす演技をして）校門を閉め、職員室に向かう。
「月影先生」
そっと声がして、私は振り向いた。
この学校にいてはいけない生徒が、にっこり笑って立っている。
確かにうちの女子校の制服だし、ウィッグまで装着して姿形は完全な少女だが……中身はヒロヤだ。
「どうしたの、こんな所に！」
私は慌ててヒロヤの手を引っ張って校舎の裏に連れていく。
「うん、昨日潰した『ミッドナイト』の幹部が『クトゥルーの秘宝とサン・ツゥガの剣』がどうこう言ってただろ？　あれの意味がようやく判ったから、放課後はすぐに僕を迎えに来てって伝えに来た」
「そ、それぐらいは……メールで伝えなさい」
私は身体がじんわり熱くなるのを感じながら、それでも真面目な月影テルミの声と顔で少年を窘めた。
「誰かにばれたらどうするの」
実を言うと、私が教師に復帰したとき、近くの男子校にヒロヤも生徒として通っている。
表向きは私の従兄弟で、親から頼まれて面倒を見ている、ということにして、同じマンションの隣同士（実際には隠しドアで隣の部屋に行けるのだが）。

ヒロヤも学校では大人しい眼鏡姿の文化系で、上手く立ち回っているようだ。
問題なのは、時折こうして女装して私の所に遊びに来ること。
「大丈夫だよ。この時間、僕らの行為に気づくとしたらクララか、ハニー・ザ・ハガーの中の子ぐらいだし」
そういって、少年は背伸びして、私にキスをした……反射的に私もかがんでそれを受け容れてしまう。
ヒロヤの女装はとても似合ってる。何度か他の生徒達に見られたが、彼の正体はバレていない。
……問題はそうじゃなく。
大抵、名目はこういう連絡事項を伝えるためなのだが、実際は違うのだ。
私の超感覚は、ヒロヤが発情しているのをその体臭と表情の中から読み取っていて、もう身体が準備を始めている。
「でも……」
「大丈夫、どっちかに見られたら、その子を僕らの仲間に引き入れよう」
「いやあの、私の生徒……」
「でも君は僕の牝犬だろ、飼い主のオーダーは叶えないと」
「いやあの……」
「それとも、レズは嫌い？」
「ち、違うけど……」。
「いいじゃない。昨日は潜水艦の中から資料と生存者を運び出すだけでお互いくたびれたから、デキなかったでしょ？」
ヒロヤは私の身体に抱きつきながらそっと囁いた。
「な、何が、よ……」
私はわかりきってることを聞いた。
彼とともにヒーロー側に復帰して以来、着用するようになった卑猥な下着の股布に、最初の発情した一滴がしたたるのを感じる。

「セックス、ファック。おま○こ」
「……」
ぞくぞく、と私の背筋が震えた。
ヒロヤによって変えられたものがもう一つある。
「僕の可愛い女教師の牝犬に、種付けしたいんだ、月影先生」
私はとても、淫らな言葉に敏感になってしまった。
「だ、駄目……もうすぐ授業が」
「二校目まで授業無いでしょ？　今日の職員朝礼は教頭先生の出張で延期だし」
「な、なんでそこまで知ってるの？」
「知ってるからこんなかっこうして、ここまで来たんだよ？　淫乱な僕の牝犬がお○んこから汁を溢れさせて、学校の床を汚さないように」
少年が淫猥な単語を言うたび、私の身体を電流が走る。
「ねえ、月影先生、セックスしよ？」
そう言って、少年のたおやかな手が、私の手を取ってスカートの上から股間で猛り狂っているペニスを握らせた。
鼻腔はもう、先走りの汁の匂いを嗅いでいる。
ああもう。だめ。
こうなったらセックスする、セックスする、セックスするの。
「し、しかたない……わね」
「そう、仕方ないよね？」
「ええ、私は……あなたの牝犬だもの」
私はそう言って、タイトスカートをめくり上げ、青いTバックを食い込ませた尻肉を女装した少年の前に突きだした。
腰から上は、厳しい生活指導の月影テルミなのに、下は無毛の丘、クリトリスにピアスを付け、淫猥な下着を身につけた淫らな牝犬。
そんな自分がひどくいやらしく、淫らに思えてますます愛液があふれ出す。

「お、犯して」
周囲に人の気配が無いのは知っていた。それに……声を上げないで、こういう場所でセックスをするのは、完全に密閉された部屋で、大声をあげてのたうつのとは違う快楽があった。
それに、絶頂を迎える前後、頭が白熱して周囲への注意が途切れている時に、誰かに見られたらという不安な、罪悪感も入り交じった期待もある。
「うん」
間髪入れずに、圧倒的なものが私の中を貫いて、思わず声が出そうになるのを両手で口を塞いだ。
ところで、ヒロヤは知っているのだろうか。
「誓いの指輪」は実を言えば使用者の覚悟を示すためのもので、一ヶ月もするとただの指輪、あるいはピアスに戻るのだということを。
私はいま、自分の意志で彼の元にいるのだということを。
だが、そんな思考もごりごりと膣内を抉るように、音を立てないようにゆっくり腰をローリングさせて動く少年のペニスと、尻肉に突き立てられた指先からくる感触が与えてくれる白濁した精液色の快楽の中に沈んでいく。
やがて、ヒロヤのペニスが、たっぷりと私の子宮から溢れるほどのザーメンをはき出し、そのまま二度目へと突入する。
薬物組織のトップにして、優秀な開発者だった彼は、肉体を遺伝子改造していて、あらゆる毒物への耐性と、圧倒的な体力、そして歪なまでの大きく節くれ立ったペニスを持っていた。
そして、同時にスーパーヒロインである私を失神させるほどの精力も。
あれから何回も私たちは精神融合するほどのセックスをしていた。

その度に、この冷笑的で、何を考えているか分からない少年の内面が見えてくる。
私たちは魂で結ばれていた。
じっくり動くのが耐えられなくなってきたのか、ヒロヤは小刻みに腰を動かすことに変化し、断続的で、圧倒的なストロークの快楽がじりじりと私の身体を焦がす。
私が自らの指をアナルに入れてこねようとすると、少年の親指が潜り込んできて、思わず一瞬、声が出た。
「アルテミス、アルテミス、アルテミス、アルテミス、アルテミスぅ……」
ヒロヤは私の名前を呼びながら、二度目の射精を始めようと、ペニスを膨らませ始めた。
ああ、それだけで身体がふわりと浮きそうだ。
私はのけぞり、全身を震わせ指先でコンクリートの壁を削りながら、いつ、彼に「愛している」と言ってやろうかと一瞬考えていたが、それもまた官能の白い光の中に消えていく。

もっともその日の午後、私たちがハニー・ザ・ハガーを狙うブロウジョブ残党との騒動に巻き込まれるとは思いもよらなかった。

さらに言うと、私とクララがそこからさらに色々あって無力化、ブロウジョブに囚われ、それを救うためにヒロヤことブルー・スカルと、変身時に記憶の無いハニー・ザ・ハガーが紆余曲折あって肉体関係を結び(後に私とも)、戦いの末に救いだしたものの、女神にしか通じない、特殊な誘淫薬物を投与されたクララが――――。

つまり、私たち全員が肉体関係を持ち、結果アテナお姉様こと初代エイスワンダーと、その夫であり、クララの父であるB.M・ザ・シューターと大もめに揉めることになろうとは、その時考えてもいなかったのだけれど……ね。

完

『蠍星のプリンセス』

デススティンガーの大冒険 -

あの爆発で異世界に飛ばされ、ひょんなことからその世界を滅亡から救い、しかも子種まで授かってしまう。ハッピーポイズンブライトストーリースピンオフとか。彼女には幸せになって欲しいです。

『大首領・・・生きてみるものですね、あの世界で全てを道連れしたいほど呪わしく思った全ての物が、此処では私に前を見て生きろと後押しするのです。』

ウチムスは3巻だけでは持ったないほどの魅力に溢れた作品だとおもいますー。
またどこかで彼等、彼女等に会えることを楽しみにしております。

画：迂闊十臓

BLOW JOB

権力者のエゴと欲望が生んだ悲しき怪人結社

大首領（ゼノビア）
アテナや旦那との因縁
には泣けました・・

心をわすれた科学には
地獄の夢しかうまれない。。
やはり諸悪の根源はエゴ
むき出しの権力と心を捨
てた科学者でした!!

-ヴィラン-
顔を隠して体隠さずという
、け○こ○仮面よろしく、
け○こ○怪人的なのはナカ
ナカエロスではないかと。

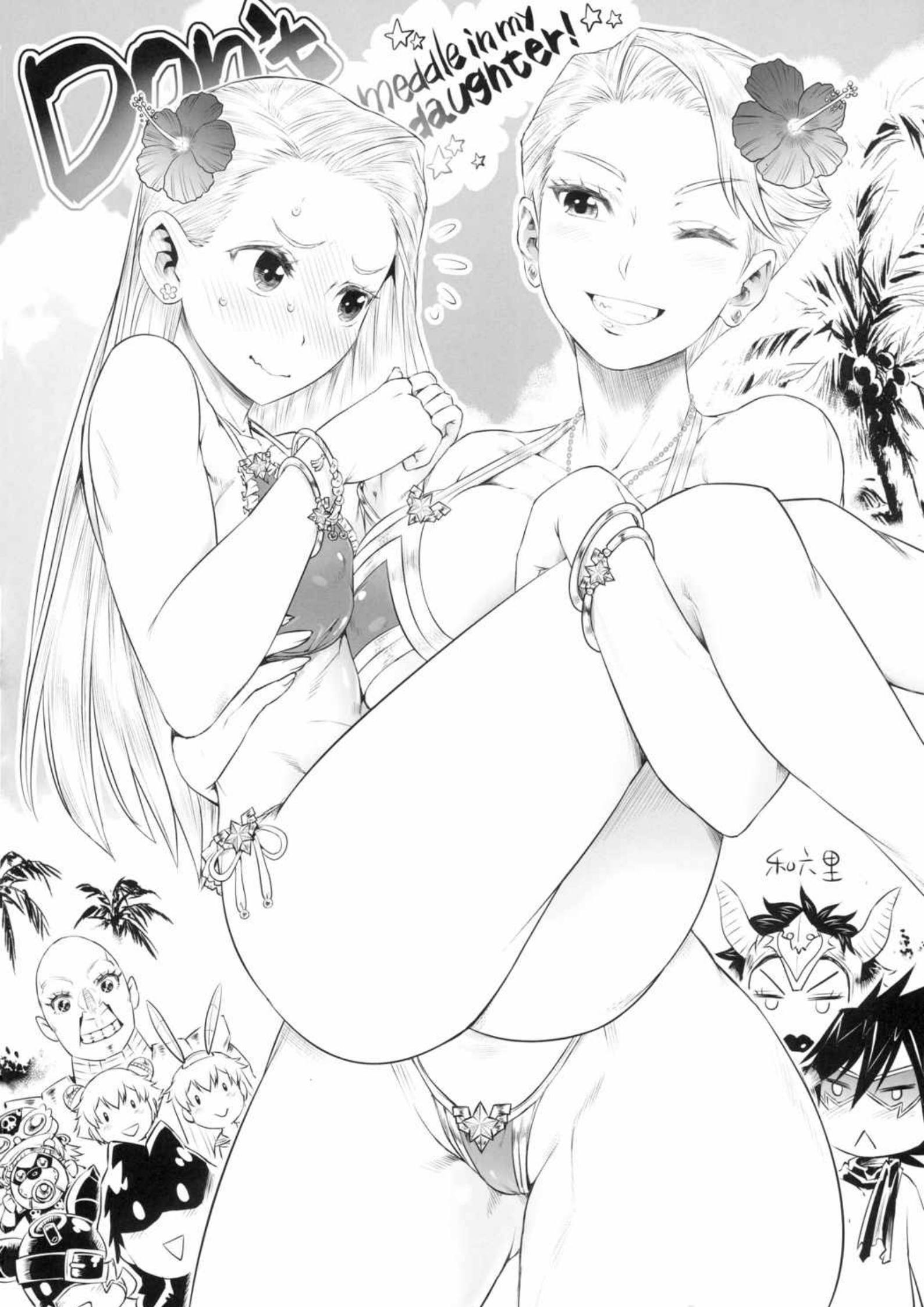
シェル・ウイドー
貝娘 海や水中の活動が得意、
頭部の触覚から超指向性サウンド
ソニックを出して目標をバラバラにする。
背中のシェル（貝殻）で体を包んで漏斗
のポンプジェット推進で一種のドリル魚雷
の様な体当たり攻撃も出来たり、お腹は膨
らましてそこに海水とか溜めたり、
産んだ稚魚を膨らましたお腹で育て
たりできたりするかも。

ポイズン・ハニービー
蜂娘（はちっこ）。体を硬化キチン質化して
砲弾も弾く。お尻の針には鋼鉄も溶かす毒
やら仕込んでたり 複眼で全周囲を一度に
認識することが出来るので彼女に視覚は
存在しない、趣味はガーデニング、珍しい
鉢植えには目がない。

描いた人　おおくぼマタギ

ねぇ…
またしたく
なってきちゃった…
ぐいィ
今度は
こっちで…
ね♥
ああんッ
お尻ではしたなく
ゲボッッ
ゲボボッ
ゲボボオッッ
イッちゃう
ううッ！
最近
クララ
家帰らないね
あんな
サカリのついた
家に帰れるかッ！
カーッ

おしまい♥


Don't
meddle in my daughter!
和六里

おはよう
かわいコちゃーん
はいはい朝ごはんできましたよーっ
あのさぁ
前々から思ってたんだけどォ

『I get a kick out of you.』
youshi kanoe

まだまだ
整髪剤を落としてきたパパ
可愛い娘のお願いとあっちゃ仕方ねぇ
パパ大人っぽく変身しちゃお～っと!!
はやくはやく～
ハイこれどーぞ
じゃあ先ずはオーソドックスにー…
七三分け!!
大人なリーマン目指したのに何故か強まるサイドキック感!!
ん…?
ピー
キャー
うーん…
オールバック!! どことなく下っ端感…
ま♡これはこれで♡
もーママはなんでもいいん…
あっ
おい 今なんか異音と軽い衝撃が
あー…
えっと…
……
あらら…
ごめんな さーい!!
あとはママに任せるね!!
赤ちゃんとさんぽいってくるー!!
うんやっぱりこうなるよな…

丸刈りになっちゃったわね〜…

いいよいいよ髪なんかすぐ伸びるさ!!

なんというか…より若返った感じよね

あ、手触りいい感じ♡

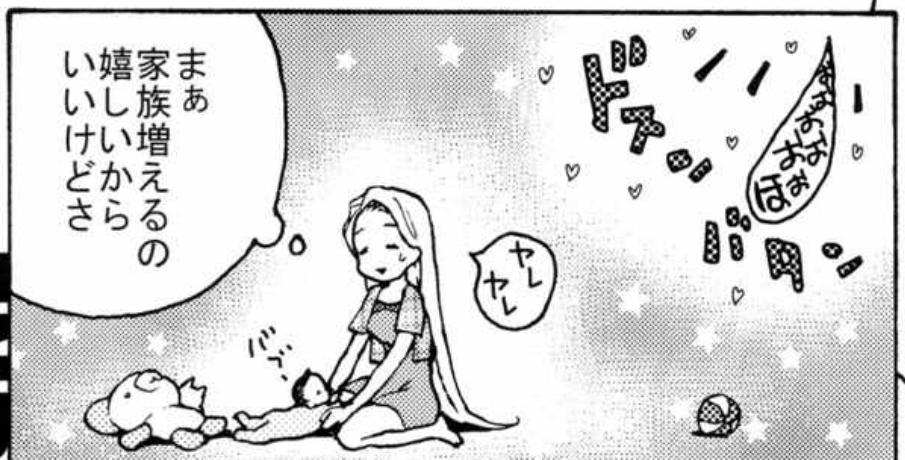
夏だしさっぱりしてイイかもな

頭洗うのも楽そうし

セットの手間も省けるし……

あっ…でも…なんか指先が感じちゃう♡

ア…アテナ…?



まぁ家族増えるの嬉しいからいいけどさ

END

差出人　：エイスワンダー<eighthwonder@yeaah.com>
題名　：教えてください
送信日時　：20XX/07/25 19:15
宛先　：おじさん<powerofinsects@virgin.com>

最後の授業

差出人　：おじさん<powerofinsects@virgin.com>
題名　：Re:教えてください
送信日時　：20XX/07/25 21:33
宛先　：エイスワンダー<eighthwonder@yeaah.com>

ティクラクラン

差出人　：エイスワンダー＜eighthwonder@yeaah.com＞
題名　：教えてください
送信日時　：20XX/07/25 19:15
宛先　：おじさん＜powerofinsects@virgin.com＞

おじさんこんばんは。
またわからないことがあったので教えてください。
悪い人をやっつけた時、一緒に壊しちゃった建物とか車とかは片づけた方がいいのかな？
いつもは任務が終わったらすぐに帰っちゃうんだけど、あとで現場を通ったら自衛隊とか沢山の人たちが修復工事とかやってて大変そうだったの。弁償するお金なんかないから、せめてちょっと手伝った方がいいかもしれないと思って。
テレビの特撮とか見ても、戦いが終わったらすぐ場面が変わってしまうので参考になりません。
よろしくお願いします。

差出人　：おじさん＜powerofinsects@virgin.com＞
題名　：Re:教えてください
送信日時　：20XX/07/25 21:33
宛先　：エイスワンダー＜eighthwonder@yeaah.com＞

ちょお待てお前、なんでお前俺のメールアドレス知ってるねん！　ＮＵＤＥが調べたんか！
この前は勢いで色々話はしたけど、俺とお前はあくまでも敵同士やぞ！
敵にお気軽なメール送って「よろしくお願いします」とか言うな！

それはそれとして、戦いの後始末は基本的に要らんで。自衛隊とかが戦闘後にやってる後始末は災害出動やから、納税者は堂々とやってもらったらええねん。
それから、俺らの戦いで家とか車が壊れても、保険会社は天災やなくて車の当て逃げ事故と同じように扱うはずやから、別に弁償なんかせんでええ。
もっと言うとやな、家の建て替えとか車の買い替えは、日本経済の活性化にもつながるんやで。だいたい、折れた柱とかえっちらおっちら担いでるヒーローなんかサマにならんやろ。スーパーヒロインを名乗りたいんやったら、人からどう見られてるかも意識せなあかんで。

とにかく、メールなんか二度と送ってくんなよ！　今度会う時は敵同士や、容赦はせんぞ！

差出人　：エイスワンダー＜eighthwonder@yeaah.com＞
題名　：教えてください11
送信日時　：20XX/08/14 10:09
宛先　：ゼクトロンさん＜powerofinsects@virgin.com＞

ゼクトロンさんこんにちは。暑い日が続いてるけど元気ですか。皮膚呼吸とかできるんですか。
今日は、私の親友についての話を聞いてください。
すごく仲のいい友達がいるんだけど、その子は私がエイスワンダーをやってることを知りません。
エイスワンダーとしての任務が忙しくて、しょっちゅうその子との約束を破ったり、一緒にいても途中で帰ったりしないといけません。
でも、その子は私にすごく優しくて、いつも何も聞かずに私を笑顔で見送ってくれるんです。
それがとても嬉しいし、その子がいるから頑張ろうって気にもなるんだけど、エイスワンダーのことを内緒にしてるのが辛いです。
その子はとても優しいので、もし打ち明けても他の誰も言わないでいてくれると思います。もうはっきり言っちゃった方が楽になれそうな気がします。
おじさんはこういう気持ちになったことがありますか？

差出人　：ゼクトロンさん＜powerofinsects@virgin.com＞
題名　：Re:教えてください11
送信日時　：20XX/08/14 15:24
宛先　：エイスワンダー＜eighthwonder@yeaah.com＞

ほんまに暑いな。ちなみに俺の皮膚には汗腺がないから汗はかかへんのや。そいで、脇腹の気門ていうとこで呼吸してるから、真夏でも意外と楽なんやで。ただし、外側の骨格がいったん熱持ったら、日陰に入ってもなかなか冷めへんけどな。

友達のことやけど、難しい話やな。
俺は見ての通り外見でバレバレやから、人に正体を隠すとかはしてへんけど（ていうか正体は俺も知らん）、隠し事をするしんどさはよう分かるで。嬢ちゃんが楽になりたい気持ちもな。
せやけど、友達には打ち明けん方がええ。親しい友達なら尚更や。
仲の良くない相手に秘密を明かしたら、そいつが誰かに漏らす心配をせなあかん。親友やったらそんなことせんやろうから安心して話せる。それで嬢ちゃんは楽になれる。
でもな、今度はその親友の方が誰にも言えない秘密を抱える羽目になるんやで。結局は、自分の辛さを親友にバトンタッチすることにしかならんのや。
誰にも言えない、誰にも認められない、そんなことも飲み込んで戦わなあかんのがヒーローや。
その親友とは今のままの付き合いを大事にした方がええで。

差出人　：エイスワンダー＜eighthwonder@yeaah.com＞
題名　：教えてください23
送信日時　：20XX/09/23 23:44
宛先　：ゼクトロンさん＜powerofinsects@virgin.com＞

ゼクトロンさんこんばんは。
聞いて聞いて。
今日もいつも通りヴィランを一人片づけたんだけど、そいつがやられる間際に「自分がいつも正しいと思うな。お前が正しいなんて誰が決めた」とか言い出したんだよ。
私が正義であっちが悪に決まってるのに、何言ってんだか。負け惜しみもいいところだよね。
もちろん最終的にやっつけちゃった。最近、決着つくまでの時間がだんだん短くなってるんだよ。
私が強くなったのかな。ヴィランが弱くなったのかな。
これからも世界を守るために頑張りまーす。

差出人　：ゼクトロンさん＜powerofinsects@virgin.com＞
題名　：Re:教えてください23
送信日時　：20XX/09/25 04:01
宛先　：エイスワンダー＜eighthwonder@yeaah.com＞

＞今日もいつも通りヴィランを一人片づけたんだけど、そいつがやられる間際に「自分がいつも正
＞しいと思うな。お前が正しいなんて誰が決めた」とか言い出したんだよ。

ははは、そいつも生意気言うたもんやな。
嬢ちゃんの言う通り、たぶん苦し紛れの負け惜しみやろうな。
戦いがスピーディーになってきてるのはええことや。戦いを重ねれば重ねるほど強くなれる。強くなるのに限界なんかないんやで。

もっと強くなりたいんやったら、戦いにおいてものすごく大事なことを俺が直接教えたる。
来週、開いてる時間あるか？

ゼクトロンが指定した場所は郊外の採石場だった。
空から舞い降りたクララは大小の石が転がる砂地に立ち、周囲を見回した。
かつては緑豊かだったらしき山は大きく削り取られ、重機の爪痕も真新しい崖の荒涼たる地肌が陽光に曝されていた。少し離れたところに高速道路のインターチェンジが見え、ひっきりなしに行きかう車の音がくぐもって聞こえてくる。
ちょうど待ち合わせの時間が来た。
ゼクトロンの姿はどこにも見えない。
「おじさん？」
「ここや、嬢ちゃん」クララの頭上から声が降ってきた。
切り立った崖の頂上で、ゼクトロンは白雲たなびく青空をバックに堂々と仁王立ちしていた。
甲虫のような外骨格に覆われ、大きな複眼をきらめかせたその姿は異形ではあるが雄々しく、公的に活躍が認められた登録ヒーローに劣らなかった。
「どうっ！」
気合い一閃、ゼクトロンは両手を伸ばして崖からジャンプし、華麗に空を切ってクララの眼前に着地した。
「どうしたの、おじさん」クララは首をかしげた。
「なんか、前に会った時と雰囲気が違うよ」
「約束通り、戦いにおける大事なことを教えたる」ゼクトロンの口調は素っ気なかった。「これは秘密訓練や。ここに来ることを他の誰かに言うたか」
「ううん。おじさんに言われた通り、内緒で来たよ」
「ほんなら、早速レッスン開始や」
「え、それって……」
言いかけたクララの背後に、突然別の気配があらわれて急激に距離を詰めてきた。
慌てて振り返ろうとしたクララの背中に衝撃が走り、つんのめった彼女の身体が地面に叩きつけられた。ゼクトロンはあたかもそれを予期していたかのように、冷静に後ずさってクララから距離を取った。
クララは即座に起き上がって反撃しようとしたが、彼女に立ち上がる隙すら与えず、別の角度から第二撃が襲った。続いて第三撃。
再び地面に這いつくばったクララは、自分をじっと見下ろしているゼクトロンにすがるような視線を向けた。
「おじさん……何を……」
ゼクトロンは何も答えず、腕を組んでクララを見つめている。
ようやく腹をくくったクララはぎりっと歯を食いしばり、次の攻撃を予期して振り向きざまに拳を振るった。
クララの拳は誰かの手のひらに受け止められた。
その手の向こうで、見知らぬ男の顔がニヤニヤと笑っていた。男の両目は巨大なダイヤモンドのような多面体のゴーグルに覆われ、後頭部にはくじゃくの羽を連想させる精巧なデバイスが装着されていた。
「動きが鈍いな、エイスワンダー」
「くっ！」
クララは猛然とパンチとキックのラッシュを繰り出した。一発でも食らえば、並みのヴィランなら悶絶する威力がある。
一方、男は涼しい顔でクララの攻撃を確実にいなしていく。まるで、彼女の攻撃がどこに来るかを最初から知っているかのようだった。
「ほうれ」男が薄ら笑いを浮かべてクララのハイキックを受け流した。
バランスを崩したクララの側頭部に男のチョップが直撃し、彼女は砂の中に顔を突っ伏した。
クララは砂にむせながら身体を起こそうとしたが、今度は脇腹に男のキックがめり込んだ。身体をくの字に折って呻きながら、クララはまたゼクトロンを見た。もはや言葉も出ない。
男はへらへら笑いながらクララを眺めている。
「こいつはチクタク。今日の特別講師や」ゼクトロンの複眼からは何の表情も読み取れなかった。「戦いにおいて大事なことって、何かわかったか？」
クララは荒い息を吐きながら首を振った。
「それはな、『敵を疑うこと』や！」ゼクトロンは声を張り上げた。「プロウジョブの宿敵エイスワンダーを、たった一人で好きな場所へおびき出せる。こんなチャンスを俺らが逃がすと思うか？」
ゼクトロンはいらいらと歩き回った。
「俺は前に言うたよな、次に会う時は敵同士やから容赦はせん、って。お前は今、敵と馴れ合った挙句に足元すくわれて絶体絶命に陥っとんねや！」彼はクララに指を突き付けた。「俺はプロウジョブの使命としてお前を罠にはめた。お前がＮＵＤＥの任務として俺の仲間を倒すのと一緒や。だから悪く思うな」
ゼクトロンはひとしきりまくしたてると、クララに背を向けて飛び立ち、彼女の視界から消えた。
ゼクトロンと入れ替わるように、後に残ったチクタクがクララにずいと歩み寄った。
「さて、続けようか」チクタクはわざとらしく両腕を伸ばしてストレッチ運動をしてみせた。「今度はそっちが先攻でいいぜ」
クララは渾身の力で立ち上がり、チクタクと向かい合った。彼の攻撃を食らった場所が、心臓の鼓動に合わせて痛みの信号を際限なく発している。
クララは両の拳を握りしめた。チクタクとの間合いは理想的だった。この距離でクララが繰り出す電光石火のパンチを躱すのはまず不可能だった。
「やあっ！」
クララの右手が一閃した。
負傷を割り引いても完璧なパンチだった。チクタクが反応する間もなく、クララの拳が彼の顔面にめり込むはずだった。
チクタクは頭だけをわずかに右へ傾けた。

それだけの動作でクララのパンチは空を切った。
「くそおっ！」
クララは勢いに任せて闇雲にパンチを放ち続けた。
チクタクは必要最小限の動きで、その攻撃をことごとく回避していく。
クララが力を使い果たし、攻撃が間延びした一瞬をついて、チクタクは手に持った何かを彼女の脇腹に突き立てた。
「ぎゃっ！」
今までとは違う尖った激痛に、クララの身体が反射的にのけぞった。
チクタクが手に持っていたのは、先端が丸まった子供用のはさみだった。
クララの身体は母アテナと同様に、鋼鉄より硬く絹よりしなやかで、刃物はもちろん弾丸や光線でも全て跳ね返す。
しかし、皮膚に痛覚がないわけではない。火に触れば熱いし、針で突けば痛みが走る。むしろ、皮膚を容易に貫通しない分、尖ったものが刺さる痛みは常人以上かもしれない。
チクタクはそれを承知で、あえて中途半端に先端が鈍い、しかもクララの肌に深く食い込む程度には細い子供用のはさみを使ったのだ。
チクタクは痛みに悶えるクララの周囲を回りながら、逆手に持ったはさみを繰り返し突き出した。
クララは激痛をこらえて弱弱しくはさみを払いのけようとするが、チクタクはそれさえも巧妙にかいくぐり、ぐさぐさと陰湿な攻撃を繰り返した。
クララの露出した腕や腿に、はさみで突かれた赤い跡がみるみる増えていった。
「苦戦してるな、エイスワンダー」チクタクは満面の笑みを浮かべていた。「こんな弱そうなおっさん相手に、なんで勝てないのか不思議だろう？」
たしかに、チクタクは頭部のデバイス類を除けば何の変哲もない中年男にしか見えなかった。筋骨隆々でもなく、バネのある肢体を備えているわけでもない。
「もうお前に勝ち目はないから、特別に種明かししてやろう」
そう言うと、チクタクは一際強い力ではさみをクララのふくらはぎに突き立てた。
「ああっ！」
気力が尽きたクララは、横ざまに転倒したきり立ち上がれなかった。
「俺の頭脳はな、あらゆる物の五秒先の動きを先読みできるんだよ。数万通りの可能性を一瞬でシミュレートし、相手がどう動くかを予測する。この頭の機械はその演算を助け、このゴーグルが予測される動きを視聴覚イメージとして見せてくれる」
チクタクはべらべらとしゃべる一方で、自分の話に合いの手を入れるかのように、しつこくはさみでクララの身体を責め苛んだ。
「言うなれば、俺は世界より常に五秒進んだ時計みたいなもんだ」チクタクははさみを普通に持ち替えた。「さて、そろそろブロウジョブ本部へご一緒いただく時間だが、その前にちょっとだけ楽しませてもらうぜ」
チクタクの開いていた方の手からワイヤーが飛び出し、その先に付いた吸盤がクララの腹部に張り付いた。
「ああああああああああああああ！」
クララが絶叫し、その全身が激しく痙攣した。
ひとしきり電撃を与えた後、チクタクははさみの刃をクララのコスチュームの胸元に差し入れた。
クララの硬直した身体は全く抵抗を示さない。
「このはさみはな、見た目はちゃちいが刃は特注品なんだ」
チクタクの言葉通り、はさみの刃を閉じると、胸の中央部のベルトに似た部分があっさり切断された。
「ついにエイスワンダーを捕えた者として、多少の目の保養は役得だよな」
チクタクはいやらしく笑いながら、クララの胸を開こうと手を伸ばした。
クララの身体は麻痺していたが意識ははっきりしていた。彼女は身を乗り出してくるチクタクを為す術もなく見つめるしかなかった。
その時、チクタクの背後に影が差した。
「レッスン終了や」
影が動いた。

チクタクが目を覚ました時、最初に目に入ったのは排気ガスですすけた木の葉だった。密集した葉の間から陽の光が差し込んでいる。彼は生垣の中に埋もれるようにして横たわっていた。
生垣の外から、けたたましい車の通過音がひっきりなしに聞こえてくる。
チクタクは上半身を起こし、生垣から頭を出した。
彼がいたのは高速道路の中央分離帯だった。彼のすぐ両脇を、たくさんのトラックや車が目まぐるしく行きかっている。
少し離れたところに、さっきまで自分がいたはずの採石場が見えた。
チクタクの記憶は、エイスワンダーのバストを拝もうとコスチュームをめくろうとしたところで途切れていた。
一体何があったのか。
こんなところで寝ている場合ではなかった。エイスワンダーをブロウジョブ本部に連行しなければならない。
チクタクは慌てて立ち上がった。彼は飛行能力も優れたジャンプ力も持っていないので、採石場に戻るには高速道路を横切って行くしかない。
すぐ脇の車線を大型トラックが通り過ぎるのを見計らって、彼は足を踏み出した。
突然、目の前で突風が吹き、空気が圧力を持った

かのようにチクタクを押し戻した。まるで、目に見えない巨大な物体が眼前を通り過ぎたような感覚だった。

数秒遅れて、彼の前を大型トレーラーが通り過ぎた。続けて、耳をつんざくクラクションが尾を引いて遠ざかった。

あれだけ大きな車両がそばを通り過ぎたのに、風は全く起こらなかった。

自分の両手を目の前にかざしてみた。

他の全ては正常に見えているのに、両手だけが見えなかった。両手をぶるぶると振ってみても視界に入ってこない。

チクタクが呆然としていると、やがて自分の視界に両手が入ってきた。さっき彼が動かした通りの動作をしてみせた。

デバイスが誤作動していた。数秒先の視聴覚イメージを見せるはずのゴーグルが、なぜか数秒遅れのイメージを彼の脳に送り込んでいる。

チクタクは慌ててゴーグルを外そうとした。

どうやっても取れなかった。

ようやく事態を飲み込んだチクタクは慄然とした。

自分の視聴覚が信用できない状態で、大量の車が行きかう高速道路を横断しなければならない。

もはやエイスワンダーを捕まえるどころではない。

チクタクは生垣の中に突っ立ち、際限なく脂汗を流し続けた。

「あれで当分は身動きできんはずや」ゼクトロンは言った。「あいつの攻略法は簡単でな。あいつの脳は目に見えているものしかシミュレーションでけへんから、挟み撃ちして後ろから攻撃したったら一巻の終わりなんや」

クララはようやく動ける程度まで回復し、疲れ切った様子で岩場に腰を下ろしていた。切られたコスチュームがはだけないよう、手で胸元を押さえている。

「……おじさん」クララは力なく訊ねた。「私を罠にかけたって……本気だったの？」

「もちろん本気やった」ゼクトロンはためらいなく答えた。「何度も言うけど、俺は敵とは馴れ合わん」

クララは衝撃を受けていた。自分とゼクトロンはもともと敵味方なのだと頭では理解していたが、本当にこうやって裏切られることは想像もしていなかった。

ごく普通の女子高生としてのクララには大勢の友達がいた。しかし、スーパーヒロインのエイスワンダーとして、疑問や悩みを相談できる大人はいなかった。母親アテナは自分がエイスワンダーだと知らないし、父親はもともといない。NUDEの面々は相談相手になってくれるが、組織人としてのバイアスがどうしてもかかってしまう。

ゼクトロンはどんな相談でも立場に関係なくあけすけに答えてくれる貴重な存在だった。

その彼が、今までの交流を全て無にしてしまうとは、どうしても信じられなかった。

クララは未練がましいと承知で訊ねた。

「じゃあ、どうして助けてくれたの？」

ゼクトロンは腕を組んで立ったまま、しばらく何も答えなかった。

「……チクタクの奴、嬢ちゃんをいたぶるのを楽しんどった。計画では、動きを取れなくして連れ去るだけのはずやった。あいつが勝手に計画を変えよったから、俺もそうしたまでや」

「……ありがとう、おじさん」クララは細い声で言った。

ゼクトロンは、礼など要らないと言いたげにいらいらと手を振った。

「ほんま言うとな、嬢ちゃんに教えたらなあかんことがもう一つあったんや」ゼクトロンは言った。「それを教えんままブロウジョブに連れて行ったら悔いが残りそうやったんでな」

「どういう意味？」

「こないだのメールで『私が正義であっちが悪』って書いてあったやろ。本気でそう思ってるんやったら、スーパーヒロイン失格や」

「失格って……どうして？」

ゼクトロンはしゃがみこんで目線の高さをクララに合わせた。

「自分が正義そのものを気取るなんて思い上がりもええとこや。嬢ちゃんは、なんかの理由で特殊な能力を持たされてるだけで、その力自体が正義なわけやない。あくまでも『正義の味方』として、正義を守るために力を尽くすのがスーパーヒロインや」

クララが初めて聞く考えだった。NUDEにスカウトされ二代目エイスワンダーになってから、何の疑問も抱かず戦ってきた。自分と正義を区別することなど考えもしなかった。

「私が正義じゃないのなら、正義はどこにあるの？」

「そこが肝心や」ゼクトロンは言った。「正義の反対は何やと思う？」

「何って……そりゃ、悪でしょ」

「ちゃうんや」ゼクトロンは首を振った。「正義の反対は『別の正義』や」

「今の俺と嬢ちゃんは対立して、敵と味方になっとる。もし嬢ちゃんの側が正義やとしたら、対立しとる俺の側は悪か？」

クララは答えられなかった。彼女にとって、ゼクトロンはもはや悪と断定できる存在ではなかった。

「俺は自分の側が悪やなんて思っとらん。ブロウジョブでは、自分のことをヴィラン(悪漢)と呼ぶ奴なんて一人もおらん」

「……」

「正義は一つやない。敵味方の一人一人が自分なりの正義を信じとる。それらは時間と共に変わったり、別れたり、一つになったりする。だからこそ、正義

の味方は、何が正義なのか、常に自分の頭で考えないかんのや。自分イコール正義なんて安易もええとこや」
クララは神妙な顔で考え込んでいた。正直、理解できたかどうか自信がない。
ゼクトロンはクララの肩に手をそっと置いた。ひんやりしたキチン質の奥のかすかなぬくもりが伝わってきた。
「今はわからんでもええ。いつかわかればええ」
ゼクトロンは腰を上げ、いつの間にかずいぶん傾いた西日をみやった。
「おじさん、これからどうするの？」クララは訊ねた。「ブロウジョブの裏切り者ってことになっちゃうよね？」
「心配いらん。俺にはやりたいことがある」
「やりたいことって？」
「自分探し」ゼクトロンはこともなげに言った。
クララは彼をじっと見つめた。
「……そんな顔すんな！」ゼクトロンは言った。「実は俺、自分の素姓がわからへんねん」
「え？」
「俺は最初からブロウジョブにおったわけやない」
「ええっ？」
「記憶喪失になってたとこを拾われたんや」
「ええええっ？」
「手がかりはある。俺は多分イギリス人なんや」
「ええええーーーっ！」
「そこで一番びっくりすんのかい！」
ゼクトロンは思わずツッコミを入れてしまった。
「意識不明で紀伊水道を漂ってるところをブロウジョブに助けられてな。俺が大阪弁しゃべってるのは、日本語教えてくれたんが大阪人やったせいや。素でしゃべったり考えたりする時は、完璧なクイーンズ・イングリッシュやねんで」
クララは呆気にとられていた。気の良い大阪弁のおじさんとしか思っていなかった相手にそんな過去があったとは。
「俺が一体何者なのか、なんで俺はこんな身体なのか、きっと手がかりはイギリスにあるはずや。今からそれを探しに行く」
「今から？」クララは素っ頓狂な声を上げた。「じゃあ、これでお別れなの？」
「ゼノビア様にバレんうちに距離を稼がんとな」準備運動のつもりか、ゼクトロンは手足や羽を動かした。「また相談事があったらメールを使え。送ってくんな言うても送って来るやろ」
クララは立ち上がってゼクトロンに歩み寄った。
「おじさん、今まで本当にありがとう。さっきの話、あたしよく考えてみる」
「無理せんと、身体に気をつけてな」ゼクトロンは言った。「俺の本名がわかったら連絡するわ」
ゼクトロンは背中の展翅板を展開してさっと飛びたち、クララの頭上に舞い上がった。
進む方向を見定めているかのように、あるいはクララとの別れを惜しむかのように、上空ですいっと二周旋回した後、ゼクトロンは西へ向かって飛び去った。
クララはもう何も言わなかった。手も振ることもせず、ただ黙ってゼクトロンを見送った。
ゼクトロンは大きく広げた展翅板を夕日に輝かせ、茜色の夕焼け空を遠ざかっていく。
急速に小さくなる彼の姿は次第に黒い点となり、やがてまばゆい夕陽に溶け込んでいった。
たとえ不倶戴天の敵だったとしても、クララの目に映るゼクトロンの姿は、『正義の味方』以外の何者でもなかった。

世界のどこかで、一万キロの距離を超えて二つの声が交錯した。
「……ゼクトロンが逐電したそうですね」
「ええ。進行中の対エイスワンダー作戦を放棄して、基地に戻らず日本を脱出しました」
「こちらに向かっていますか？」
「一直線に。今はロシア上空を通過中です」
「では英国領内に入り次第、私たちが保護します」
「記憶喪失以外の傷は完全に癒えています。帰還すれば必ずやあなた方の重要な戦力となるでしょう」
「あらためてブロウジョブに感謝の意を表します。振り返ってみれば、ゼクトロンが香港沖でＭＩＡ（作戦中行方不明）になった後、私たちは彼を死んだものと見なしていました。あなたからの接触を受けるまでは」
「彼の身体を一目見て、ＭＫウルティマ計画の産物だと確信しました。彼をきっかけにあなたがたとの接触を持てたのは、まさに天の配剤と言うべきです」
「彼が戻り次第、自分が何者なのか全て説明してやります。エイスワンダーという強敵との戦いで強化された正義感を持って真実を知れば、前よりも一層強く使命に身を捧げる覚悟を固めるでしょう」
「あなたの意向で、敢えて彼の素姓を教えずにいましたが正解だったようですね」
「私たちの作戦はいよいよ最終段階に入ります。このタイミングでのゼクトロンの復帰はサクリファイスにとって大きな助けになります」
「運命は私たちの側に立っているのです」
「お礼と言っては何ですが、先ほど、あなたから要請を受けていた機械の発送を指示しました。今週中にはお手元に届くでしょう」
「お気遣い感謝します。お互いに大義の完遂は目前です。ご武運をお祈りします、アマリリス殿」
「ゼノビアさん、あなたとブロウジョブにも神の祝福があらんことを」

差出人　：エイスワンダー＜eighthwonder@yeaah.com＞
題名　：元気ですか
送信日時　：2015/12/25 18:03
宛先　：ゼクトロンさん＜powerofinsects@virgin.com＞

ゼクトロンさん。
返事をもらえなくなって大分経つけど、今日は久しぶりにメールします。
先週、ブロウジョブとの最終決戦がありました。ヒーローたちも、ヴィランたちも、みんな一緒になって戦って、みんな一緒に勝つことができました。
あんなに大勢集まったんだからゼクトロンさんも来てるかなと思ったけど、会えなくて残念です。

今回の戦いで、ゼクトロンさんの言っていたことが本当によくわかりました。
正義とは、誰か一人のものじゃなくて、敵味方に関係なくみんなが持っているものだって。そして、正義は唯一無二じゃなくて、時と共に変わったり合流したり離れたりするものだって。
あのレディ・デススティンガーにさえも、彼女なりに信じる正義があったんだろうなと今ではわかります。

ゼクトロンさん。またゼクトロンさんに会いたいです。
いっぱいお話ししたいことがあります。
イギリスで本名はわかりましたか。この次会ったら、「おじさん」でもなく「ゼクトロンさん」でもなく、本名で呼んであげます。呼んであげたいです。
いつか会えるその日まで、どうか元気でいてください。
お返事待ってます。

ゼクトロン
本名 セオドア・エインズワース
出身 イングランド
1980年生まれ。
生まれながらに昆虫の羽根を持つ超人。
その飛翔能力を生かしてヒーローとして
活躍したが、当時の英国政府の眼に止まり
MKアルティマ計画の被験体として
囚われた。
度重なる遺伝改造の人体実験の結果、
全身昆虫さながらの異形に成り果て、
廃棄処分とされる寸前で、アマリリス
率いるテロ組織サクリファイスに救出され
以後、政府の凶行を世に知らしめるため
サクリファイスと行動を共にする。

2015年12月サクリファイスによる北海
での最終作戦に参加、英国空軍機群と
戦闘の末、敵機に体当たりしてもろとも
墜落。以後行方不明。
遺体は発見されていない。

TAMAKI'S
AMAZING COSMIC WORLD
N.U.D.E.が誇る
スーパーヒロイン
ここに結集！
マッシヴガール
フューリアス
・スリー
シスター・ヴェロシティ
スターフェアリー
Sgt.キャンディ

N・U・D・Eとは？

Next Ultimate Diffence Exportsの略。

激増するスーパーヴィラン犯罪や侵略者に対抗するため結成された汎地球規模の秘密防衛組織。最新の科学技術を応用した超兵器を多く所有し、巷に活躍するスーパーヒーロー、ヒロイン達のバックアップを主任務とする。

N・U・D・Eの支部は世界各国に存在するが、基本的にはその国々の法規に従う事を旨としているため、各支部の活動はその国の政策方針に左右される事が多い。

諸事情から幹部から隊員まで、ほぼ全て女性で構成されるため、加盟するヒーローもほぼ女性。

スーパーヒロイン達とN・U・D・Eとはあくまで協力関係に過ぎず、ヒーローとしての理念や活動は個々の判断に委ねられている。

彼女たちは出動依頼があった時のみ同司令部の指示に従い戦う。

ここではN・U・D・Eに加盟する主だったヒロインたちを紹介しよう。

☆シスター・ヴェロシティ

ダイナマイト・バディを修道女風ラバースーツに包んで戦うスーパーヒロイン。卓越した槍術と聖槍ジャッジメントランスから放たれる様々な聖魔法で戦う。その他にも対魔弾丸を放つ小型拳銃シルバー・バレットを装備。この弾丸は当たればエイスワンダーの肌をも傷つける強力無比な武器だが、彼女自身は力及ばぬ時にのみ使う「非常手段」として使用を堅く戒めている。

本名ヴェロニカ・ライエンバーグ・山科。普段は都内でOLを勤める。

元は見習いシスターだったが、ジャッジメントランスより聖なる力を授かったことにより、ヴァチカン直属の武装シスターに選抜。最強の戦士として活躍するが、ヴァチカン守護以外の戦いを禁ずる戒律に異議を唱えて破門。母方の祖母を頼って来日したところをスカウトされた。

クララがデビューするまではN・U・D・Eのトップヒロインだったため、エイスワンダーに並々ならぬライバル心を燃やしている。

並々ならぬライバル心を燃やしている。

潔癖性で男性を嫌悪さえしていたが、ある事情からいとこである10歳の少年と同居、彼に対して沸き上がる恋心と劣情に身悶えする毎日。

☆マッシヴガール

緑の肌と鋼鉄の筋肉を持つ身長2．5メートルを超えるN・U・D・E最重量級マッスルヒロイン。怪力と頑丈さではエイスワンダーと互角。

その正体は身長150センチの小柄な中学生・小中ひなた。N・U・D・E技術者の父親が発明した試験薬を飲んでしまい、変身する体となった。

この薬は飲んだ本人の抱えるコンプレックスが肉体に反映される効果があり、マッシヴガールの豪壮な姿はひ弱な自分に対するひなたのコンプレックスの裏返し。

自己嫌悪に陥ると所構わず変身してしまうが、性格も本来と反対に豪快で楽天的になるので周囲の受けはいい。

戦いが終わった後必ず性的興奮がわき起こって、自分で慰めないと収まらないのが唯一の弱点。

これもひなたが密かに抱える性への並々ならぬ感心が表出化したものと思われる。

精神年齢が近いのか、クララとは大の仲良し。

☆スターフェアリー

空を自在に舞い、幾多の超能力を操るヒロイン。何枚剥がしても無くならない星形ニップレス「スターシュリケン」で敵を倒す。

宇宙の彼方からやって来た妖精、という触れ込みだが、実はアテナと同じハイパートピアから来た女神の一人。5つ目の能力までしか目覚めなかったため女王候補からは外れたが、憧れの女神アテナと同じ様に修行で得たその力を人々のために使おうと決意。スーパーヒロインを目指して地上に降りて来た。実は同じ様な理由でヒロインとなったハイパートピアの女神は結構いる。

つい最近まで天空の島にいたため、度を過ぎたお人好しの天然ボケキャラ。だが人がいいので憎まれない。

☆Sgt.（サージェント）キャンディ

小さいながら豊満過ぎる肉体をビキニ同然の制服で隠し、拳銃から重火器まで所構わずぶっ放す露出過多気味のクレイジー・コップ（自称）。

正体は交通課に勤める正真正銘の婦警。

横行する悪事に手をこまねいている警察に堪忍袋の緒を切らし、密かにビジランティとしてヴィランを勝手に「退治」していた。それを見初めたハンナ司令にスカウトされてN・U・D・Eに加わった。

可愛い見かけに反して異様に怒りっぽく、切れると何でもぶっ壊す危ない性格だが、面倒見は良くN・U・D・E一般隊員からは「アネゴ」と慕われる。主に戦闘部隊の切り込み隊長として活躍。

☆フューリアス・スリー

N・U・D・E戦闘部門の一般隊員だったリサ・純・キサラの三人がその活躍を認められ、ヒロインに昇格、チームを組んだ。

本人達には特筆すべき特殊能力は皆無だが、Dr．荒野が着装者の個性を表層化する新型アームド・スキンを与えたところ思わぬ効果を発揮、まだまだ未熟ながら本格ヒロインとして活躍を開始した。

なお本人達が密かに決めていたチーム名「インテンス・スリー」はハンナ司令の「ダサい！」の一言でバッサリ却下。独断で「フューリアス・スリー」と名付けられたが本人達はこっちの方がカッコいいと気に入っている。

以下はそれぞれの能力。

・フューリアス・リサ　実体を伴う残像を無数に作り出す分身能力を有する。

・フューリアス・ジュン　超弾力を持つ体組織でボールの様に跳ね回り敵を倒す。

・フューリアス・キサラ　全身を液体化してあらゆる場所に侵入する。蒸発して霧になる事も可能。

この他にもN・U・D・Eには多くのヒロインが加盟している。

ウチムス世界年表

46億年前　地球誕生。

2億4千万年前　ペルセウス座NGC1260銀河で発生した巨大超新星爆発から超エネルギー生命体誕生。のちのスターゲイザー。

25万年前　原生人類誕生。

3万年前　様々な特殊能力を持つ新人類ホモ・ウルティムム出現。原生人類を奴隷化して巨大文明を繁栄させる。

2万3千年前　ムー大陸に超人類による統一国家誕生。地球全土を支配下に置く。

1万2千年前　ムー大陸最終戦争により太平洋に沈む。ムーの女性達、戦に囚われた男たちを見捨て大陸の一部に乗り空へ。天空の島ハイパートピアの誕生。僅かに生き残った男たち、現生人類と共存。混血化が進み、後の世に多く超人が誕生する萌芽となる。

1万年前　史上初の地球外からの侵略。侵略者、ヒトゲノム改造ウィルスを使用。中国夏王朝において初の人造ヒーロー「ナタク」と「ゴクウ」が完成、これを殲滅。

紀元前2600年　トロイア文明を異星生物兵器「ヒドラ」が襲撃。「旅人」を名乗る

同時期　ハイパートピア人姉妹が別の異星人兵器「デウス」の助力を得て撃滅。メソポタミア・シュメール王朝にスーパーヒーローとして初の統治者ギルガメッシュが即位。

紀元前2000年　ハイパートピア、地上との国交を断絶。

紀元前1800年頃　古代バビロニアにジャガーの頭を持つスーパーヒーローが登場。後にこの地域における「豹頭の英雄」の原型とされる。

紀元前1500年　エジプトに「ファラオ」を名乗るヒーロー出現。邪神バディオスと呼ばれる超進化生命体に勝利するも消滅。以後同地域では王をファラオと呼称する事に。

同時期　日本では初の異星人ヒーローが現れる。その姿を模して遮光機土偶が作られる。

同時期　ヒッタイト文明に超天才ミュータント出現、蒸気文明を作り上げるが異星人に滅ぼされる。

紀元前1300年　ファラオ、モーゼを名乗りエジプトからのユダヤ人脱出に寄与。

紀元前1200年　ミケーネ文明、「ヒドラ」の細胞が賦活して改良再生された「ヘイル」によって滅ぼされる。

1943年9月　メイルシュトローム、グラン・サッソ襲撃に参加。ムッソリーニを救出。

1944年6月　ノルマンディー上陸作戦にて両陣営のヒーローが激突。多くの犠牲を出す。

8月　パリ解放。勝利の影に13代目スカーレット・ピンパネルの活躍。

1945年3月　イヌガミ、南方の戦線で消息不明に。

8月　シラヌイ、原爆投下を阻止せんとするも力及ばず、広島の街と共に消滅。日本人ヒーロー全滅。

1946年10月　第二次大戦終結。ニュルンベルク裁判結審。メイルシュトロームを始めとする枢軸国側のヒーローの多くがヴィランとして裁かれる。ペーパークリップ作戦実施。ナチの人造超人計画に協力した科学者達の多くがアメリカへ。ニューワールドオーダー計画（後のMKアルティマ計画）準備段階へ。

1947年　プライベート・フリーダム突然の引退。以後完全に消息を絶つ。

1958年　戦後初の公式日本人ヒーロー・十六夜仮面登場。

1960年代　東西冷戦激化。ヒーロー両陣営に別れて敵対。第二次大戦の悲劇再び。

1962年10月　キューバ危機。フォーチュンソルジャー&ワイルドジャスティス、ロシアの改造人間ブレノーク・パトリオータと激突。

1963年8月　トンキン湾事件。ベトナム戦争開戦。

1968年3月　フォーチュンソルジャー前線へ。米兵の民間人虐殺にフォーチュンソルジャー関与の疑い。ワイルドジャスティス、アメリカ政府と軍を批判、自ら反逆者を名乗る。

1974年　イヌガミ、南方の島のジャングルで生存が確認され日本に帰国。フォーチュンソルジャーとワイルドジャスティス激突。共に行方不明。

1975年4月　ベトナム戦争終結。イヌガミ、ヴィランとして跳梁。十六夜仮面と戦い死亡。十六夜仮面、正体を明かし消息を絶つ。

1976年　ゼノビア誕生。

1978年1月　アテナ誕生。

1980年代　ニューワールドオーダー計画がMKアルティマ計画と名称改変して本格稼働。

1994年　ゼノビア18歳　8番目の力に覚醒後、ハイパートピアを出奔。MKアルティマ計画の被験者となる。

1995年　超人犯罪組織ブロウジョブ、スーパーヴィランを糾合して破壊活動開始。アテナ17歳　ハイパートピアより降臨。エイスワンダーとしてヒロインデビュー。

1996年　スターゲイザー、エネルギー生命体として地球に降り立つ。

1997年5月　アテナ19歳　B・M・ザ・シューターと結婚。

6月　ブロウジョブ東京空爆作戦決行。B・M、作戦を阻止し死亡。ブロウジョブ壊滅

紀元前756年　ギリシャにおいて「旅人」姉妹、ゼウスらヒーロー軍団と戦争手前になりかけるも、「賢者」ペパイストスの提案により体力ゲームで決着をつけることとなり、これがオリンピックの原型となる。

紀元前722年　中国では春秋時代開始、「伝説の武将」と呼ばれる超人たちの激突が各地で記録される。

紀元前200年　マダガスカル島にて、カバに擬装していた異星人の侵略が阻止され、彼らは全員地球より逃亡。以後マダガスカルにカバはいなくなる。

西暦元年　イエス・キリスト生誕。

100年前後　インドで「ゼロ」の概念が発見。異次元人「フロイウル」がこれを奪いに来るが、インドの超人「ラーマ・ヤナ」に撃退。

1189年　「異星人の侵略基地がエルサレムにある」として第三次十字軍遠征。

1200年代　「アラーの使者」を始めとするイスラムヒーロー達に撃退される。北宋にて封印されたヒトゲノム改造ウィルスが解放、1000人以上の罹患者が闘争本能の赴くままに殺し合う事態に。

1501年・同時期　数千年ぶりに「ゴクウ」と「ナタク」発動。罹患者を殲滅。後に「水滸伝」としてまとめられる。

1570年代　イングランドの某辺境にて「吸血鬼」騒動。

1792年4月　フランク地方で「獣」と呼ばれるミュータントが出没、討伐部隊が組織されるも敗北、領主の首を噛み千切った後「獣」は忽然と姿を消す。

1830年代　キャプテン・グランパス、エリザベス一世より私掠免許状を授与されスペイン幽霊海賊船艦隊と戦う。

1862年　フランス革命戦争勃発。義賊スカーレット・ピンパネル、革命政府に追われる貴族達を次々救出。

1877年　アメリカ初の黒人ヒーロー・ポーラースター、「地下鉄道（黒人奴隷逃亡幇助網）」壊滅を狙うKKKと戦う。

1906年　数学者C・L・ドジソンの妄想から生まれたヒロイン、アリス・リデル人の夢に巣食う夢魔ハートのクィーンと戦い、多くの少女達を救う。

1912年　箱館に仮面の剣士土生狼（ミブロ）とヒメガミ出現。列強各国の妖人エージェントと戦う。

1917年　拳法使いのヒーロー無影脚、香港に逗留中の孫文を清朝の暗殺組織から守る。

1935年　無影脚、辛亥革命に参加し戦死。ベドウィン出身のヒーロー・ハイダル・マリク、T・E・ロレンスとともにオスマン帝国のアラブ侵攻と戦う。

1939年9月　大日本帝国陸軍所属のヒーロー、イヌガミとシラヌイ、上海租借地にて諜報活動を展開。第二次世界大戦勃発。多くのヒーローが枢軸国、連合国両陣営に別れて敵対する事に。

1940年7月　バトル・オブ・ブリテン。空飛ぶヒーロー、ユニオン・ジャックが英空軍を率い、ドイツ空中騎兵部隊を打ち破る。

1943年2月　ホロコースト激化。12代目スカーレット・ピンパネル、ナチに追われるユダヤ人達を次々救出。プライベート・フリーダム「ガンナーサイド作戦」に従事、米軍特殊部隊と共にナチスの原爆計画を阻止。

1998年1月　ゼノビア22歳　ポイントブランクを出産。

4月　アテナ20歳　クララを出産　エイスワンダー最初の引退。

1999年3月　英国にて巨大ミュータント・グレンデル出現。

7月　初代メンバー造反の末、壊滅。日本政府、国内におけるMKアルティマ計画の全てを破棄。

2002年　リリィ誕生。MKアルティマ計画事実上の瓦解。

2011年　謎の巨大薬物密売組織誕生。全世界規模の麻薬戦争勃発。

2013年4月　サエグサ市にミス・マーベリック出現。ディアブロンナと激戦を展開。スターゲイザー、ゲイザーガールと結婚。全世界から祝福を受ける。

2014年　リリィ、イギリス政府により回収。MI-X2度目の壊滅。星マイケル（スーパーノヴァ）誕生。巨大薬物密売組織解体。理由は不明。

2015年1月　ブロウジョブ復活

3月　クララ17歳　2代目エイスワンダーとしてデビュー。

4月　アテナ37歳　初代エイスワンダーとして復活。

6月　ブロウジョブ東京占領。

12月　Wエイスワンダーによる東京解放。ブロウジョブ2度目の壊滅。サクリファイス全世界に向け宣戦布告。

2016年3月　北海油田基地ジェニファー消滅。MI-Xメンバー行方不明に。グレンデル再び出現。ヒーロー連合取り逃がす。スターゲイザー重傷を負う。南洋にてMI-Xチーム発見。国連指揮下のグレンデル追尾選任チームとなる。

2017年1月　アテナ38歳　セーラを出産。

9月　リリィ・トゥリガー、グレンデルの能力を沈静化。

3月　MI-X、MKアルティマ最後の推進者らを撃破。2代目エイスワンダー、聖すみれ学院高校に巣食う旧支配者をハニー・ザ・ハガーらと共に撃破。

6月　真鍋エリカ（ミス・マーベリック）Dr.荒野と結婚。娘マリカを授かる。

2023年1月　セーラの能力暴走。居合わせたアテナ、アルテミス、時間流に投げ込まれ、紀元前2500年のトロイアへ。以後様々な時代を彷徨ったあげく帰還。

4月　クララ25歳、2代目エイスワンダー引退。ハイパートピアの女王に即位。地上から去る。

2028年9月　セーラー2歳　3代目エイスワンダーとしてデビュー。ランゴリアーズの地球侵略開始。アテナ50歳　初代エイスワンダー三度目の復活。

2700年代　ポイントブランク人類壊滅後の世界に出現。歴史を改変するため活動開始。

By:富士原昌幸 激闘4コマ戦え!クラテちゃん
千邪眼王がやられたようだな…
フフフ…奴は四天王の中でも最弱…
エイスワンダーごときに負けるとは顔部品衆の面汚しよ…
千邪口王
千邪鼻王
千邪耳王
だが獅子は兎を狩るにも全力を出すという
行くぞ!!
四天王、合体!!!
最強!!
千邪福笑王!!!
キモっ!!
わはははははは
あはははは
第2期のラスボスに使っていいぞ!!

ご覧ください
怪ロボットの
手が今！
放送塔に
掛かりました！
いや待て！
最後！
いよいよ最後です
みなさん
さようなら
みなさん…
あれは！

来た！
来たぞ我らの勝利の女神！
待ってました！正義の味方！
がんばって——っ！

エイスワンダー！
はーい！
ウチのムスメに手を出すな！
りた～んず

ちょっと待っててね〜！

すーぐやっつけちゃうからぁ

わ〜

か〜わい〜！

このこのこの

ホカカカ

敵巨大人型兵器損耗率38%

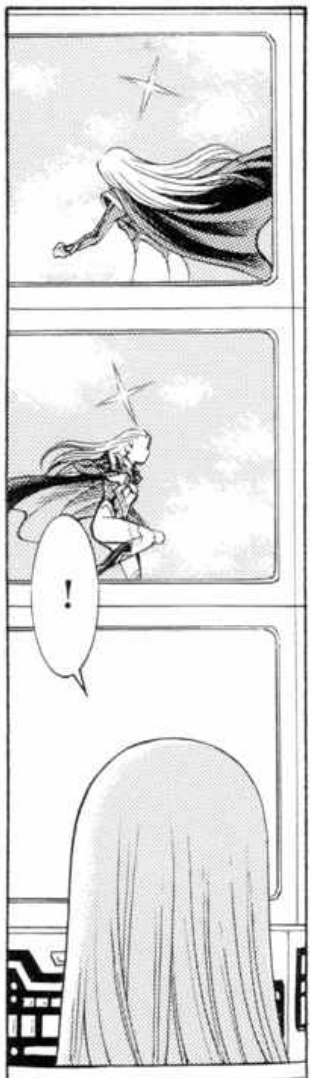
エイスワンダー押しています！

油断しない様伝えて…あのコお調子にのりやすいから

はい！

ね、ゼッカちゃん
あのロボット本当に
ゼッカちゃんが操ってる
んじゃないの？

違うって言ってンだろ
オレがブロウジョブの
廃墟から持ち出した
メカや装備は
とっくの昔に
ママと姉ちゃんに
全部ぶっ壊され
ちゃったよ！


！

現場上空に
空間歪曲を感知！
ワームホール
開きます！

ね、ワンダーちゃん
の上の方…
なんか変なもの
見えない？
え～～？
気のせいじゃん？

ズルウ
こいつめ！
まだ倒れないか！
ワームホールより異界生命体出現！
クラスB！
出番よ
ママ！

キラッ
キャッ

何、今の！
？

ブチュ

やったぞ！
エイスワンダー
ズズ
ズズ
いつもながら
お見事な勝利です！
ど～も
どもども～
キャ
ワァァァ
3代目エイスワンダー
遥セーラ 12歳
セーラ！
ビクッ

お調子に乗らないって
いつも言ってるでしょ！
2028年
東京
初代エイスワンダー
遥アテナ
50歳!!

本日出現した異界元生命体はクラスB
通算13体目の「ランゴリアーズ」です
流石に今日はちょっと苦戦したわ
もう少し手間取っていたら時間流から脱出できないところだった
…どんどん大きくなってるわねワームホールも
送り込まれる「刺客」も
これ以上セーラに内緒で撃退するのは難しいかもね
ん～あちこちまさぐられて感じちゃってたものね～ママ
ダンナが留守で男日照りがぶり返しちゃった？
ちょっよしてよ！もう五十よ？

五十路かぁ
年取る筈よ
ねえ

こないだまで
赤ん坊だったセーラが
エイスワンダー
名乗ってるんだもの

ホント驚きだわ
わずか12歳で
7つの能力を全て
開花させちゃうなんて

ハイパートピア
史上最年少
じゃないの？

そうね…それまでが
クララの17歳だったから
記録更新…

クララの活躍を
間近で観て育っちゃった
からねェ……
専属コーチに手ほどき
された様なものよ

才能もあったとは
思うけど…
飲み込み早過ぎ！

今になってみると5年前
クララがハイパートピアの
女王に即位するって突然
引退しちゃったのも
うなずけるわ

あのコ
言ってたもの

「セーラにはママや私も
及ばないとてつもない
力が眠ってる…
あのコは最強だ！」
って

そういえば
最近クララから
連絡は？

あったわよ
モーレツに
暢気なメール

新しい従者の
コが カワイイとか

あのコホントに
女王なんて
こなせてるの
かしら

確かに
クララの予感は
当たっていた

まさか

8番目(エイスワンダー)の力まで
開花しちゃうなんて

ね…

そうなのだ

これこそ
前代未聞の
異常事態と
いっていい

もっともあれを
8番目の力と
呼んでいいのかは
微妙だけれど

そもそも
8番目の力は
巨大なエネルギーに
曝され生命の危機に
陥った時にのみ発動する
時空跳躍能力

ある意味不可避の
リミッターが掛かっている

だがあのコの場合
激昂したり興奮したり
するだけで簡単に
ワームホールが
開いてしまうのだ

それも全くの
無自覚のうちに

3ヶ月前戦闘中に
初めてあのコが
ワームホールを
開いた時……

あれは
悪夢だったわ

？
あなたア！
何故ワームホールが開いたのか
そこから現れたあの怪物は何だったのか
夫はどこへ連れ去られたのか
全てが杳として知れぬまま数日が立った頃
思いもよらぬ形で真実が明らかになった
当の夫本人によって

アテナ！
CICから呼び出しよ！
「彼」から通信が入ったって！
！
カリタ
急ぎましょう！
ところで肝心のお姫様はどこにいるの？
お友達といっしょ

も〜〜〜〜〜
やんなっちゃう！
ママったらさぁ
あたし一人でも全然
やれてるってのにさ！
また始まった
ティーンブレイブス
名物
セーラのボヤキ
ティーンブレイブス
世界中から
集められた
16歳以下の年少
ヒーロー達のチーム
超人の父母を持つ
2世ヒーローが
多く集う
彼女の気持ち
もわかるよ
あのエイスワンダーが
母親なんだもの
X-マキナ

わかるわ〜〜

ウチも任務から帰った後お母さんの説教が長くてさあ

キュート・マーベリック
ミス・マーベリックの一人娘
父の発明したハイパー・アームド・スキンを纏って戦う
現在プチ反抗期

戦闘中の言葉遣いが悪い！とか

あんな戦い方じゃ周りに迷惑がかかる！とかとにかくダメだしばっか！

あ〜〜マリカのママ学校の先生だもんね〜〜〜

もうとっくに引退したってのにさ

いつまでもベテラン気取りでまいっちゃうよ

それは当然だろ

キミらのお母さん達は歴史に名を残す伝説のヒロインなんだぞ

スーパーノヴァ
スターゲイザーとゲイザーガール夫妻の間に生まれたヒーロー界のサラブレッド。引退した母に代わり父の相棒（サイドキック）を努める

出たよ優等生発言

マイケルは気にならない？

お父さん・・あのスターゲイザーだよ？

ならないよ

僕はお父さんを親としてもヒーローとしてもとても尊敬してる

教わる事もまだまだたくさんあるし

はいはい
ご立派！

……

マイケルはさぁ
お父さんが大好き
なんだねぇ

あ…

まあ…
そうだね

父さんだし

い～なあ～！

あたしもパパに
会いたぁい！

そっか今単身
赴任中だっけ

もう3ヶ月だよ？
3ヶ月！

どんな任務なのか
ママに聞いても全ッ然
教えてくれないし

そりゃまぁ
機密だろうし

心配
なのお！

大丈夫さ！
父さんが言ってた

B・M・ザ・シューターほど
タフなヒーローはいないって
どんな任務でも軽く
こなして帰って来るさ！

……

ありがと

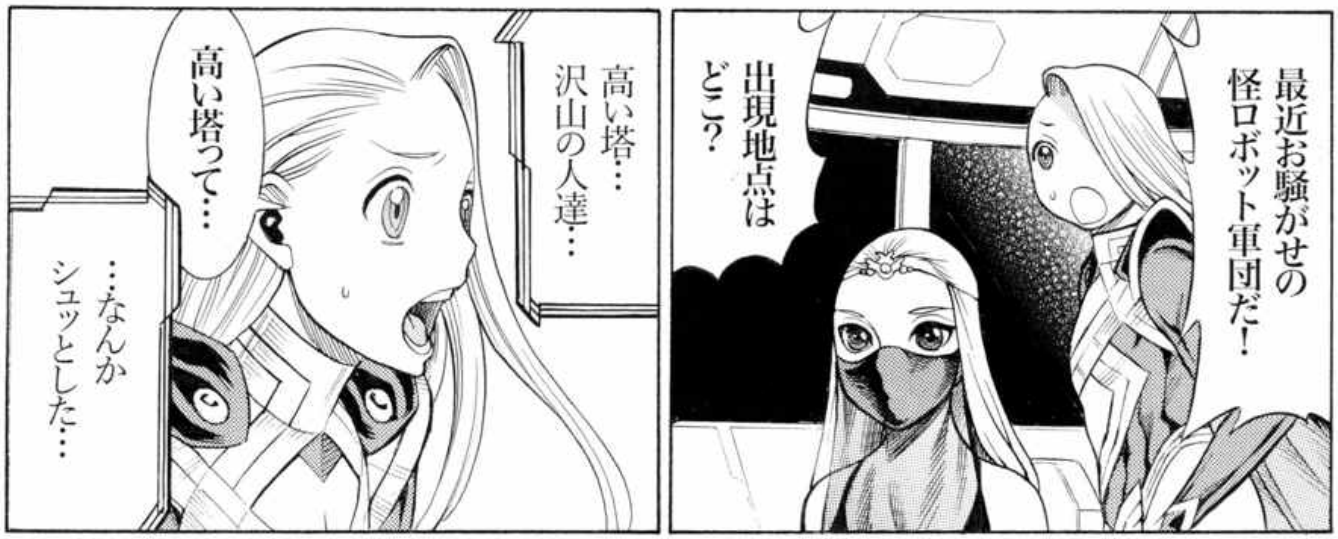
おふたりさん
いい雰囲気の
ところ悪いけど

「眠り姫」がまた
寝言を呟き始めた
わよ

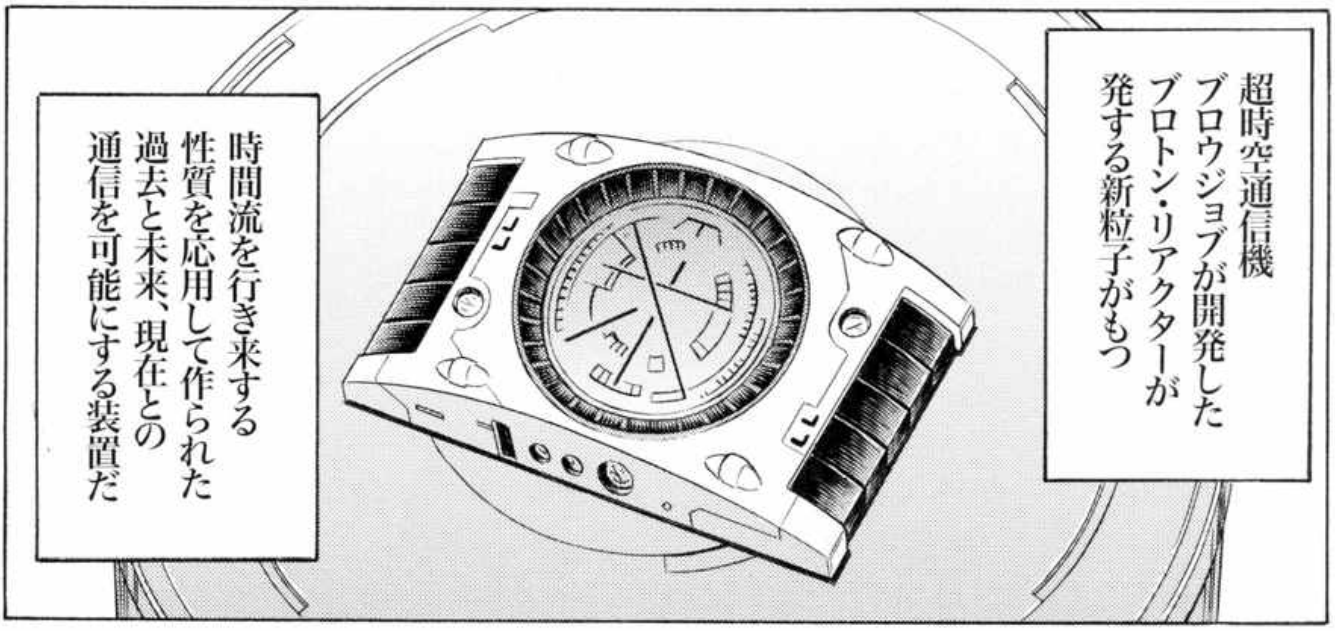
敵が来る

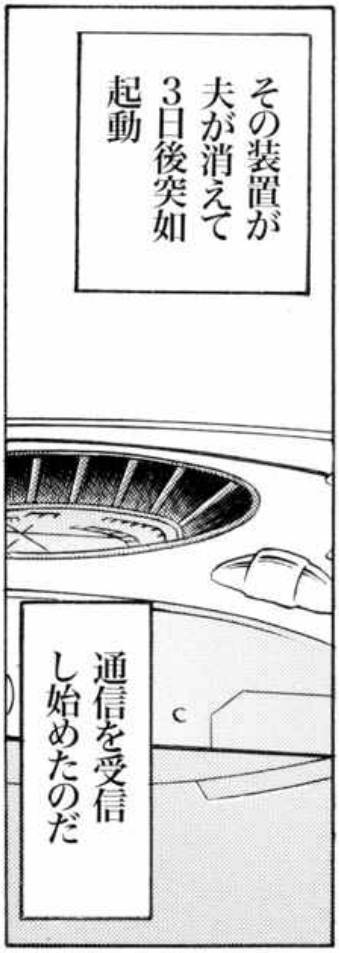
鋼鉄の波
鋼鉄の嵐

プリンセス・オーロラ
TBステーションの無菌室で眠り続ける少女。彼女が観る夢は的中率100%の予知夢であり、寝言という形でそれを仲間に伝える



てかそこはフツーにスカイツリーじゃない？
そっか！東京！
しっかりしろ自分のテリトリーじゃないか
そうとわかれば行ってきま～す
おいおいN・U・D・Eに通報しなくていいのか
い～よ！
そしたらまたママ来ちゃうもん！
今日は一人でやるんだから！
シュッ
あちょ～～～～っ！





発信元は
なんと
700年後

送信者は…

我が夫
ブランキーだった

ダンナは
時間流を流され
28世紀の未来へ
辿り着いていた！

そこで
彼が目にした世界は
驚愕すべきものだった！

28世紀：地球は
あの怪生物
「ランゴリアーズ」に
よって壊滅！

僅かに生き残った人類は
ランゴリアーズの餌として
追われ、狩られる地獄と
化していたのだ！

何故こんな
世界になって
しまったのか

答えを求めて
彼はN・U・D・Eの
本部跡を
探し当てた

残されていた
当時の詳細な
記録により

彼は
ショッキングな
事実を知る

原因は
セーラだった！

奴らはあのコが開けた
ワームホールを通じて
この世界に侵入し

あのコを
攫ったのだ！

セーラを取り込んで
8番目の力を自在にする
術を得た奴らは
地球侵略を開始

世界中に同時に開いた
無数のワームホールから
押し寄せた
ランゴリアーズ大軍団の
前にあらゆるヒーロー
あらゆる軍隊は壊滅

人類文明は
わずか3日で
崩壊した

だがダンナは
ふと気付いた

もしこの記録に
記された日時を
過去に知らせる
事ができたなら

セーラ誘拐を
阻む事が
できるのでは…

彼は廃墟を
必死で探し…

遂に発見
したのだ！

超時空通信機を！

事のあらましと
次にセーラがワームホールを
開けてしまう「Xデー」を
知らされた私たちは
あのコに気付かれない様
密かにフォローを開始

見事
あのコを撮おうとした
ランゴリアーズの尖兵を
撃退した

すると
未来世界でも
驚くべき異変が
起きた

記録に記された
「Xデー」の日付の
記述が変わった…
というのだ！

彼は確信した

歴史は
変えられる！

かくて
700年の時を隔て
ダンナと私たちの
共同作戦が
開始された

彼が伝えて来た
情報を元に
私たちが
ランゴリアーズを
倒し

それによって
改変した未来を
ダンナがまた
私たちに伝える…
その繰り返しだ

何度敵を撃退しても
未来のダンナからは
次のXデーの日付を
伝えてくるだけで
歴史が変わって
未来世界が救われたと
いう知らせはこない

ランゴリアーズとの
戦いはいつまで
続くのか…

…それまで
私たちはあのコを
守り通せるのか
……

ア…テナ

アテナ…
聞こえ…か

！

あなた！

戦いに
備え…

奴らが
いよいよ…

これまでにない
大攻勢…

8月…16日…
14時…36分…

8月16日？
今日じゃないの！

も～～～～どーして
いつもギリギリで
知らせてくるのよ！

14:25:08

あと10分もないわ！

場所は？
ダメです 切れました！
セーラは 今どこ？
応答ありません GPSもオフに なってます！
何ですって！
もう出動 したのかも
ヴィラン出現の 通報は？
ありません！
まだ出現 していないんだわ
きっとオーロラ姫の 予知夢に従って 先回りしてるのよ！
予知夢を観たら 知らせろっていって あるのに！
私も出る！
いつでも対応 できる様に！
出し抜くつもりなのよ 私達を……
今日帰ったら 覚悟なさいよ もおおおおおおおっ！

ズズーン
ズズーン

…とにかく
愛と正義の使徒！
エイスワンダー
ここに推参！

天が呼ぶ！
地が呼ぶ！
人が呼ぶ！
悪を倒せと…
……何だっけ？

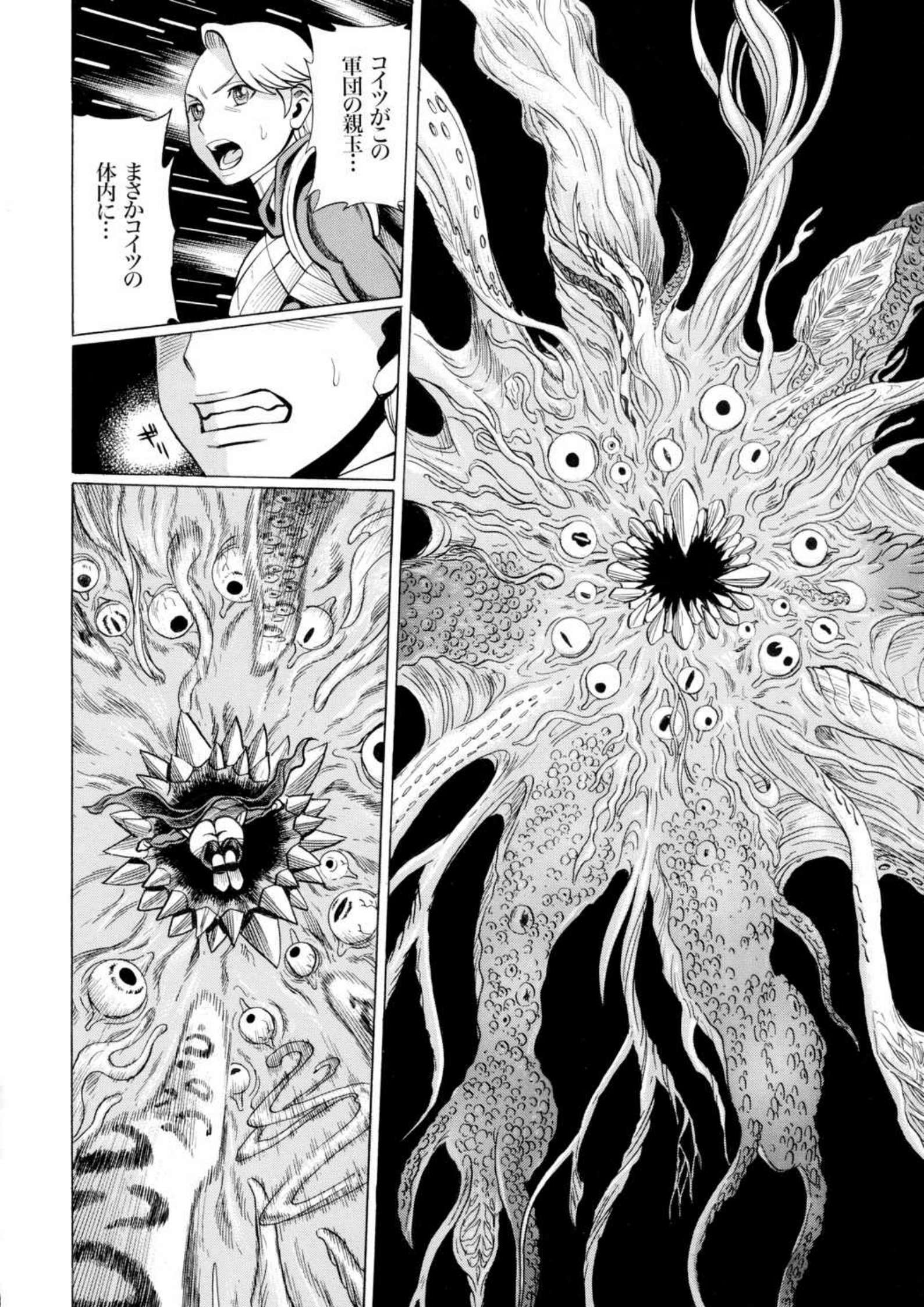
ふふふ
ビビってる
ビビってる！
さすがお姉ちゃん
直伝の名乗りは
効き目あるなあ！
よ～～～し
いっくぞおお！

なに？
何これェ
セーラ！
助けに来たよ！
みんな！
なんなのコイツら！

後から後から出て来るよっ
うわっ離せ！
いやぁ！
キモォ～～～～イ
わっ！
いやっ
やっ
やあ！
ママアアアアアつ！

泣かない！
スーパーヒロインでしょ！
ママっ！
あまり母さんに心配かけちゃダメだゾ！
お父さん？
ママっ
ママぁ
ママママ
も〜、この歳でこのコスチュームキツいのよ？
ジョナサン！
エリカさん
ココはお願いします！
事情は心得た！
任せて行きたまえ！
ママアアア！

ものすごい大群！
本当に大攻勢
なんだわ！
とても私たちだけ
では防ぎきれない…
アテナ
！
アテナ
聞こえるか
まさか
あなた？
こっちだ
アテナ
！


コイツがこの軍団の親玉…
まさかコイツの体内に…
ギリ

むぅ
さすがに数が多過ぎる！
いかん！一般人が！
やーめーろ～～～っ

セーラ！
よく頑張ったわね
クララお姉ちゃん！
ハイパートピアの女神たちよ この不浄の生き物どもを駆逐せよ！
ただの一匹も生かして返すな！
お姉ちゃん！
ママが…！
大丈夫！
ママはこの世で最も偉大な戦士なんだから！

こっちだ
アテナ！

あなた！

ああ…
ああ よかった
無事なのね！
久しぶり…
相変わらず
別嬪だな！
あっ！
パシ
すまねぇ
コイツに吸収され
ねぇ様シールドを
張ってンだ
…！
どうした

ああ…少しばかり老けただろ

まさか…

こちらではまだ3ヶ月…

仕方ないのさ あっちの世界じゃあ もう13年経っちまってるからな

ちょうどいいさ

これでやっとお前と釣り合いの取れる歳になった

募る話はあとだ！この大群の標的はアテナ！

お前なんだ

！

セーラ強奪を阻まれ続けて奴らは焦ってる

そこで奴らお前を倒すため自分達の支配してる28世紀に援軍を求めたんだ

奴らアッチの世界で最大級の個体を投入して勝負をかけてきやがった

いくらお前でも援護なしではさすがに分が悪かろうと思ってな

あえて姿をさらしてパクリとやられてついて来たって訳さ

無茶な事を

さぁて
やろうぜ
アテナ

俺たち夫婦を
一緒に捕らえるなんて
大ドジ踏んだ
こいつらに
目にモノ見せて
やろうや！

ええ！

ママ！

ママあ！

な…

何？

ギュッ

パパに会ったわ！

みてあなた！

奴ら撤退していく！

私たちも
帰りましょう！

クララもセーラも
あなたのお帰りを
待ってます！

クララ…
セーラ…
会いたいなァ

オレはこのまま
28世紀へ戻るぜ

そんな！

まだ未来の世界は
救われちゃいない
歴史は変わって
いないんだ

誰かが向こうから
伝え続けなきゃな
Xデーの情報を

いやっ
いやよ
あなただけ
一人で…

いい子だから
聞いてくれ アテナ

奴らに取り込まれて
わかった事がある

ランゴリアーズは
この時間流の中に
生息する種族なんだ

遥か太古
この空間に
閉じ込められ…
外へ出る機会を
狙っていた！

そこへ
ワームホールを
開けてしまう
セーラが現れて

奴らは
ココから脱出する
手段を知って
しまった

だがその反対も
また真理

セーラが成長し
自在に時間流を
操る事が
出来る様に
なったとしたら？

彼らを一網打尽に
する事が出来る！

その通りだ！

セーラを育てろ！
強くまっすぐな
戦士に！

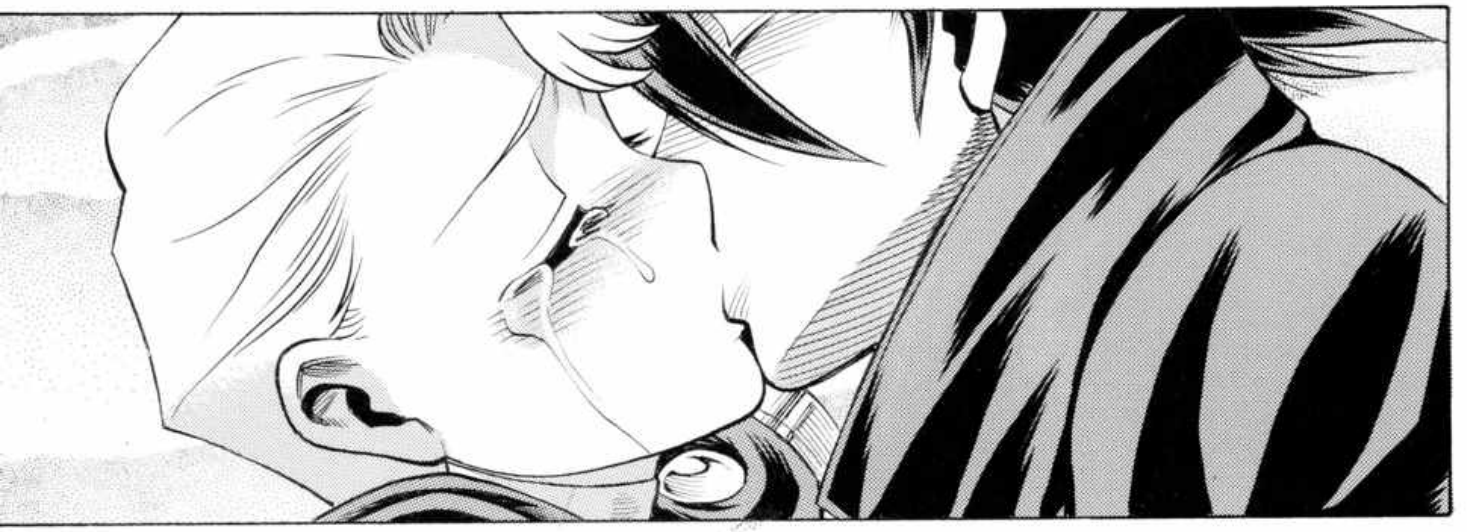
この戦い
あのコが鍵だ！

クララを
女王に育てた
お前だ

必ず出来る！

あなた…

いつまでたっても
ママの苦労は
絶えないな
あなたに
くらべたら…



未来が変わって
世界が救われたら
知らせるから
みんなで迎えに
来てくれ
なアに きっと
すぐさ
娘たちに
愛してるって
伝えてくれよ
あなたあ！

パパが…
2人に
愛してる…って

パパ…元気だった？

無事なのね…

ママだけ
ずる〜〜〜い！

あたしもパパに
会いたかったァ〜〜！

大丈夫
もうすぐ

きっともうすぐ
家族みんなで……

あとがき

ども、環です。
この同人誌は私が少年画報社刊「月刊ヤングコミック」にて連載させて頂いたちょいエロスーパーヒロインコミック「ウチのムスメに手を出すな！～母娘ヒロイン奮闘す～」の公式同人誌第２弾です。
去年末第１弾を刊行したところ、執筆者のみなさんから「楽しかったので是非また描きたい」との有り難いお言葉を頂き、「しからば」と調子にのってしまいました（笑）。

「ウチムス」本編は今年の春大団円のうちに連載を終了しましたが、最後まで多くの読者のみなさんに愛して頂きました。
出来ましたらこの先も折りをみて、このヒロイン達を描いて行けたら、と思っております。

今回の同人誌は前回からのアメコミ好き超人作家達に加え、新たな執筆陣に参加して頂きました。最後に簡単なご紹介をさせて頂き、巻末の言葉とさせて頂きます。

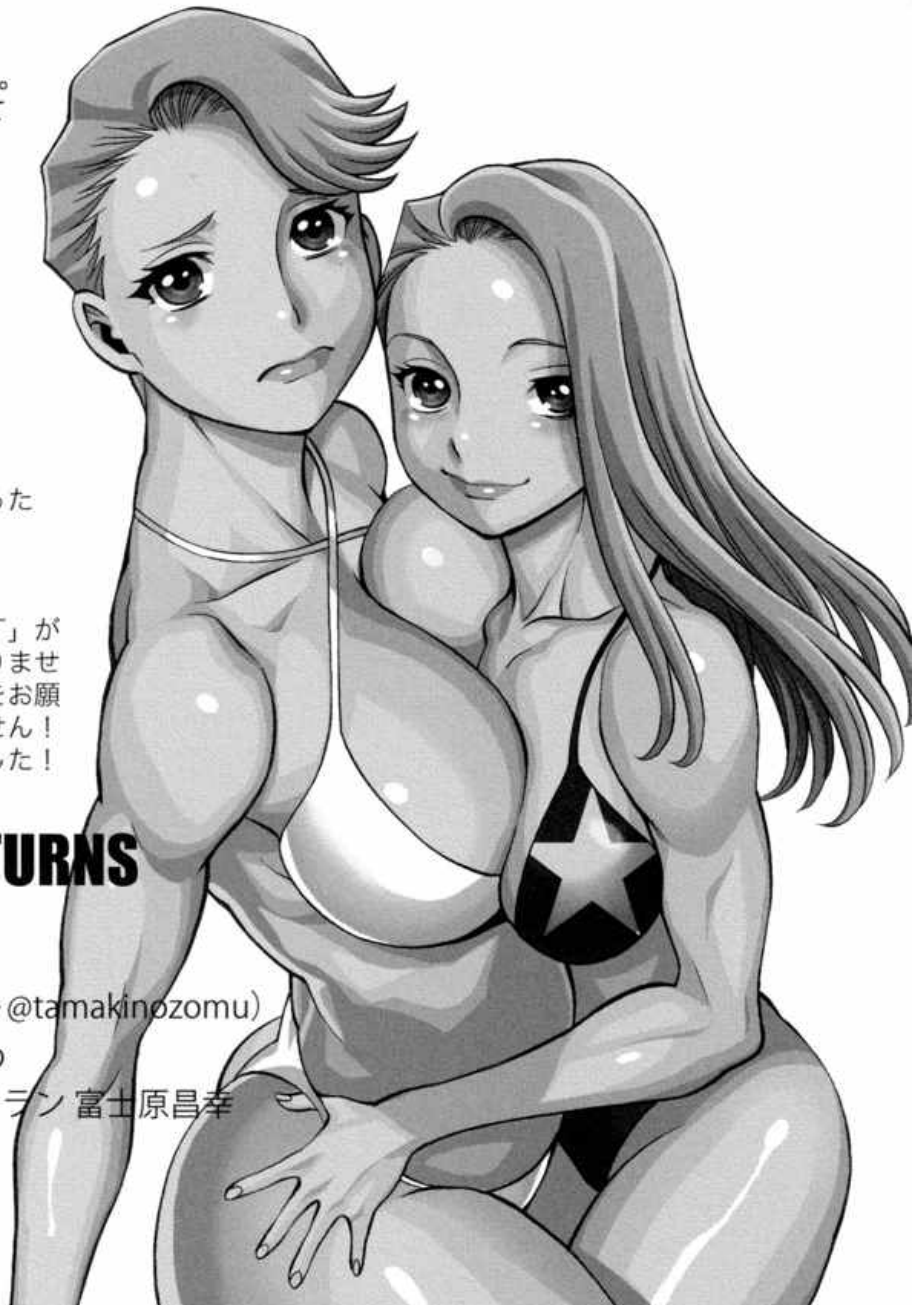
○迂闊十臓さま
大迫力メカと魅惑的なムチムチ美女を精力的に発表し続ける絵師さま。
ある日突然エイスワンダーの絵をネットにアップされたのを見て腰を抜かしました。
スゴく嬉しかったなあ。

ICEさま
フタナリイラストで知らぬ者のいないICEさん。
ずっと好きだったのですがウチムスを読まれていると知り、今回原稿をお願いしました！

○ささきタツヤさま
ガチムチ筋肉美女を描かせたら並ぶ者なし！
ウチムス最終回のヒーロー＆ヴィランコンテストに応募して下さった邪神ダナズゥを描いて下さいました！

○おおくぼマタギさま
ウチムス同人誌を出したいと真っ先に仰って下さったマタギさん。
だったらウチに描いてよ！とお誘いしてしまった（笑）。お願いして良かった！

○和六里ハルさま
正直な話、和六里先生の「勇者の娘と出刃包丁」がなかったらウチムスはこういった内容にはなりませんでした！リスペクトの意味も込め、ご寄稿をお願いしました。殆ど面識もなかったのにすみません！
でも先生の描かれたアテナ＆クララは最高でした！



MILF of STEEL RETURNS

環屋

編集人　環望（Twitterアカウント@tamakinozomu）
連絡先　tamakiya66@yahoo.co.jp
執筆者　環望 Gemma ティクラクラン 富士原昌幸
発行日　2015年8月16日
印刷所　POPLS